関中本千字文

隋　智永

中国法書選 28

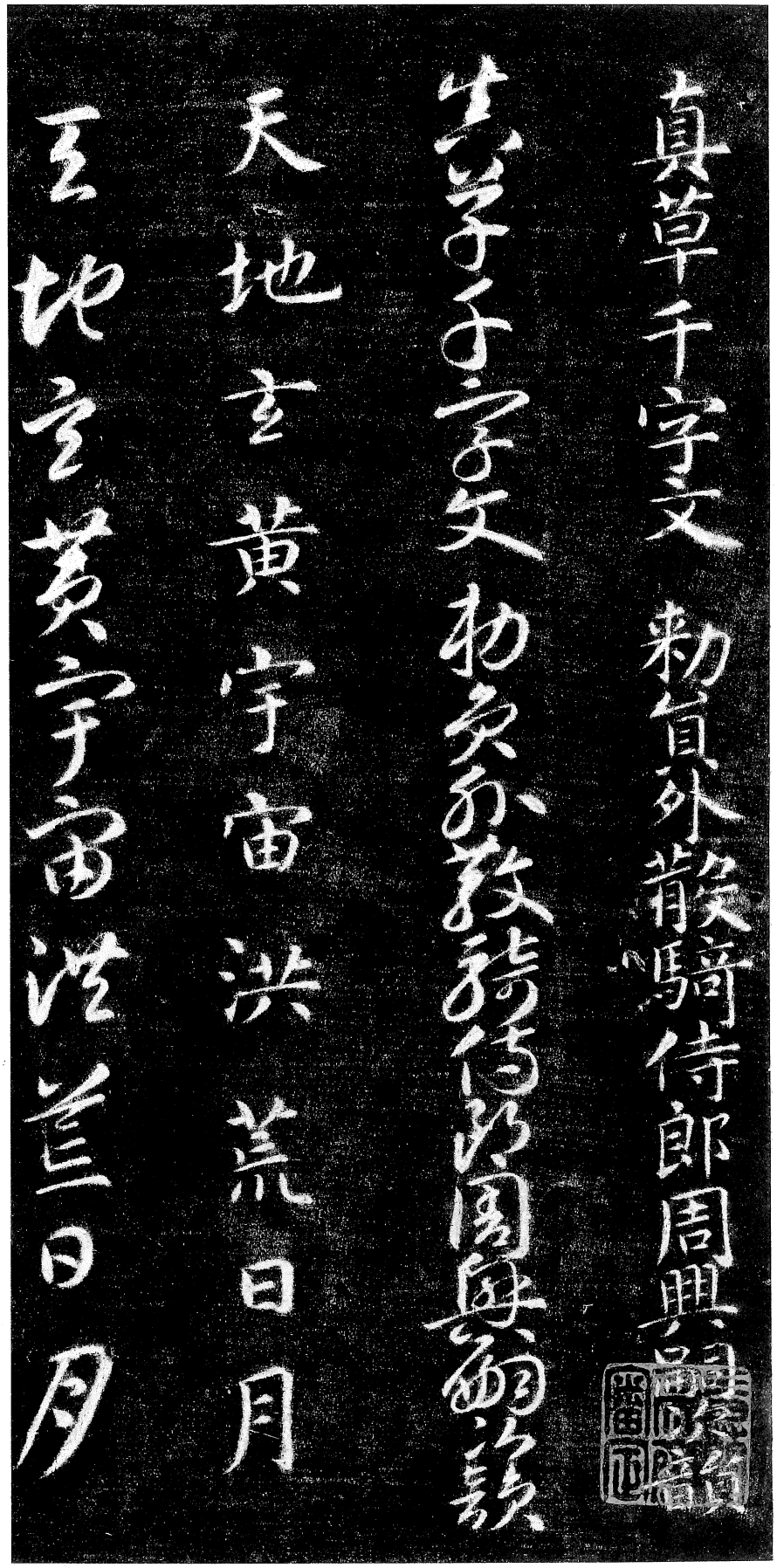
二玄社

中国法書選 28

関中本千字文

隋　智永

二玄社

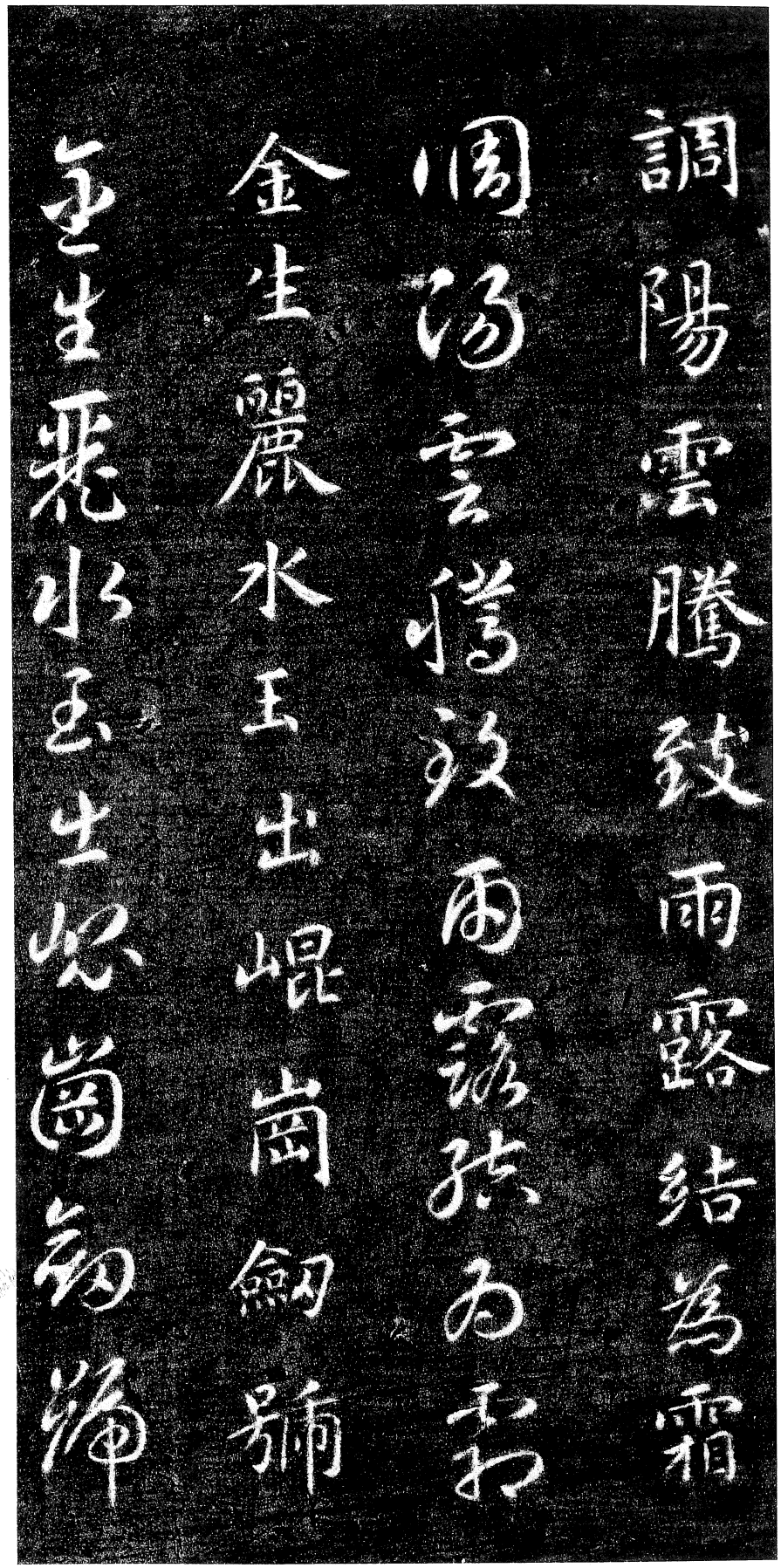


眞草千字文。勅員外散騎侍郎周興嗣次韻。　天地玄黄。宇宙洪荒。日月

真草千字文。勅員外散騎侍郎周興嗣次韻。　天地は玄黄、宇宙は洪荒なり。日月は

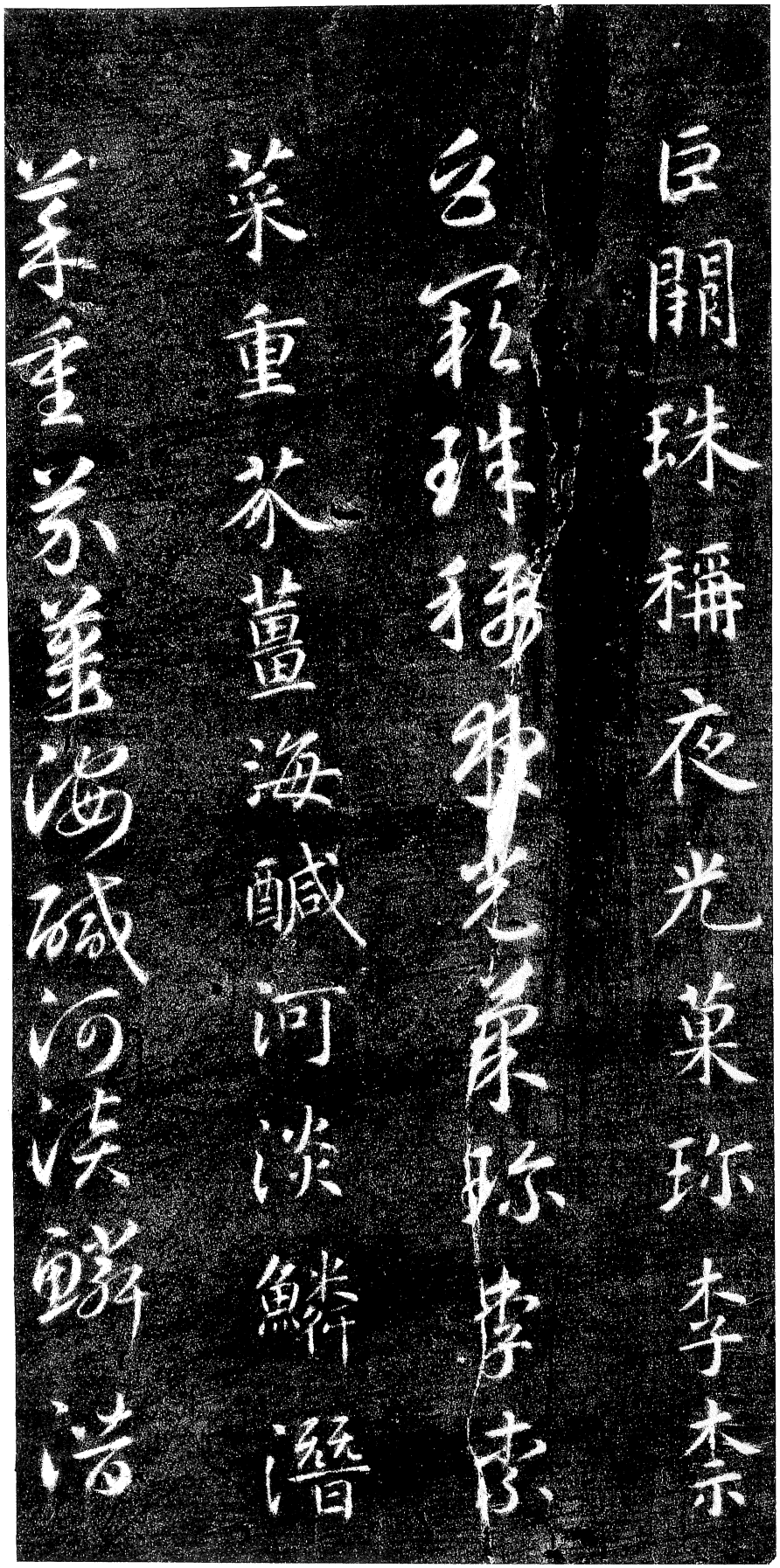
盈昊辰宿列張寒来暑往
秋收冬藏閏餘成歳律召
秋収冬蔵閏餘成歳律呂

盈昊。辰宿列張。寒來暑往。秋收冬藏。閏餘成歳。律召
盈昊し、辰宿は列張す。寒さ来り暑さ往き、秋収めて冬蔵す。閏餘もて歳を成し、律呂は



調陽。雲騰致雨。露結爲霜。金生麗水。玉出崐崗。劒

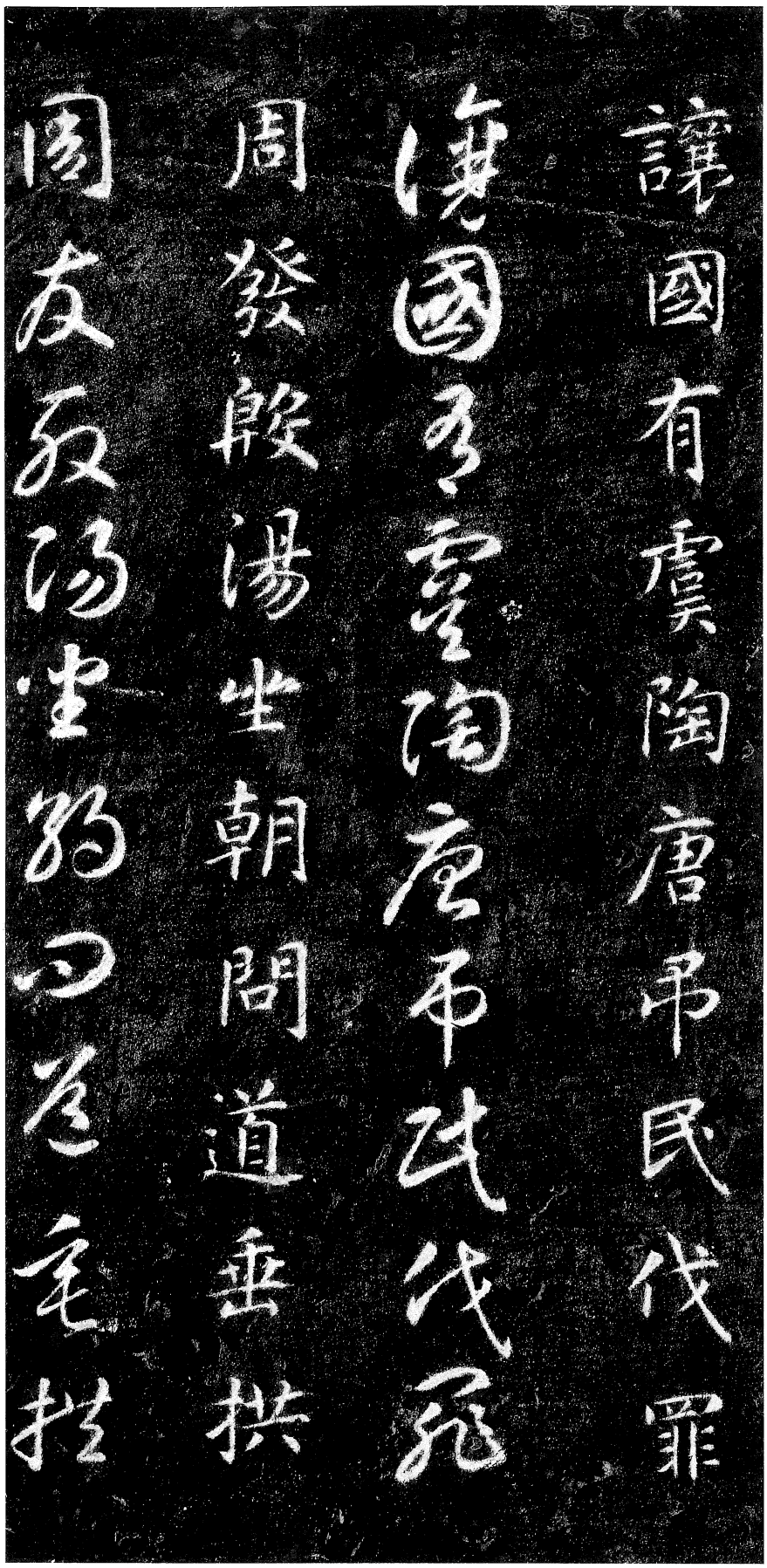
調陽す。雲は騰りて雨を致し、露は結びて霜と為る。金は麗水に生じ、玉は崑岡に出づ。劍は（巨闕と）号し、



巨闕。珠稱夜光。菓珎李柰。菜重芥薑。海鹹河淡。鱗潛
珠は夜光と称す。菓は李柰を珍とし、菜は芥薑を重んず。海は鹹く河は淡し、鱗は潜み

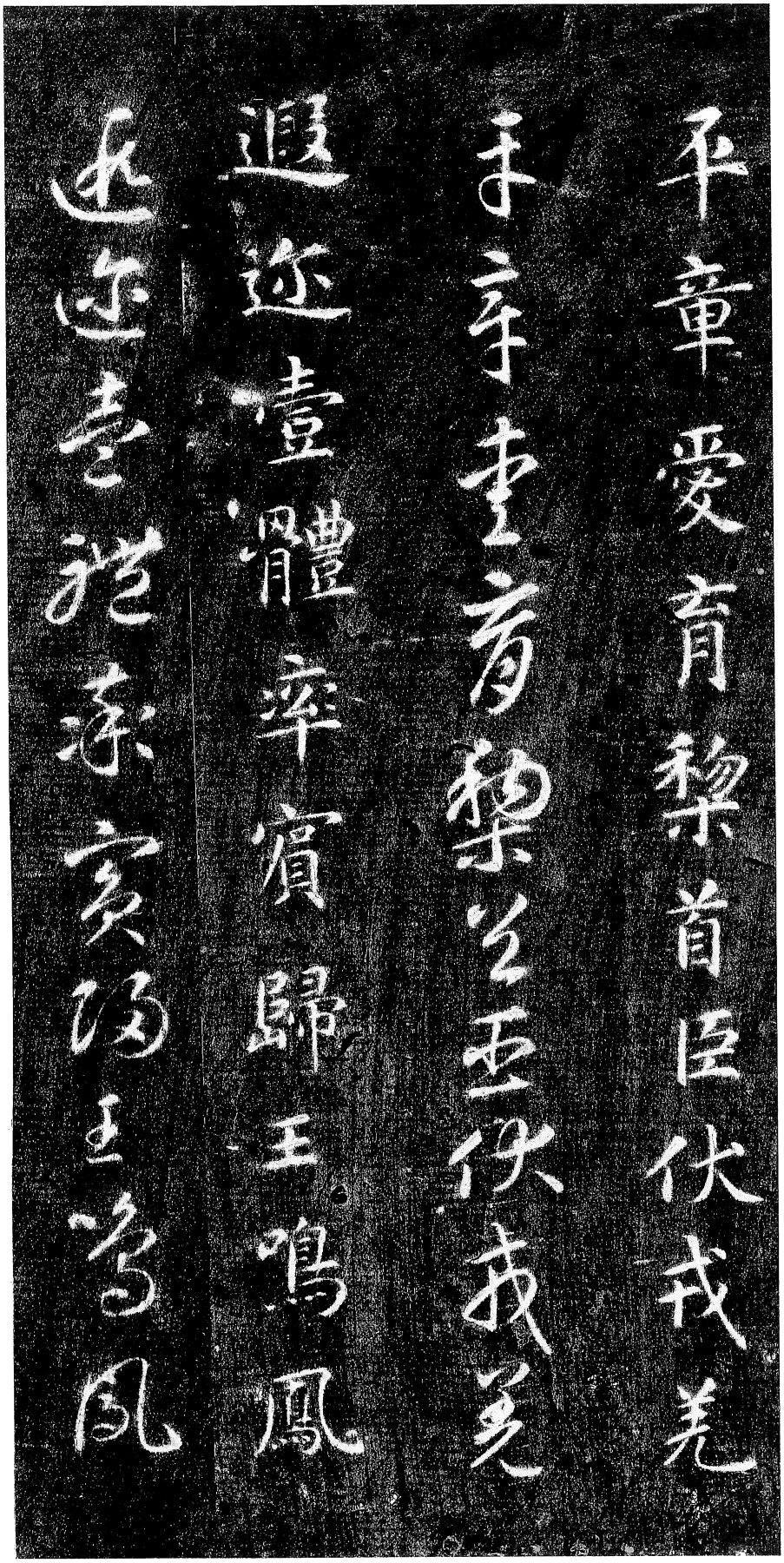
羽翔龍師火帝鳥官人皇
始制文字乃服衣裳推位

羽翔。龍師火帝。鳥官人皇。始制文字。乃服衣裳。推位
羽は翔ける。龍師火帝、鳥官人皇。始めて文字を制り、乃ち衣裳を服す。位を推し



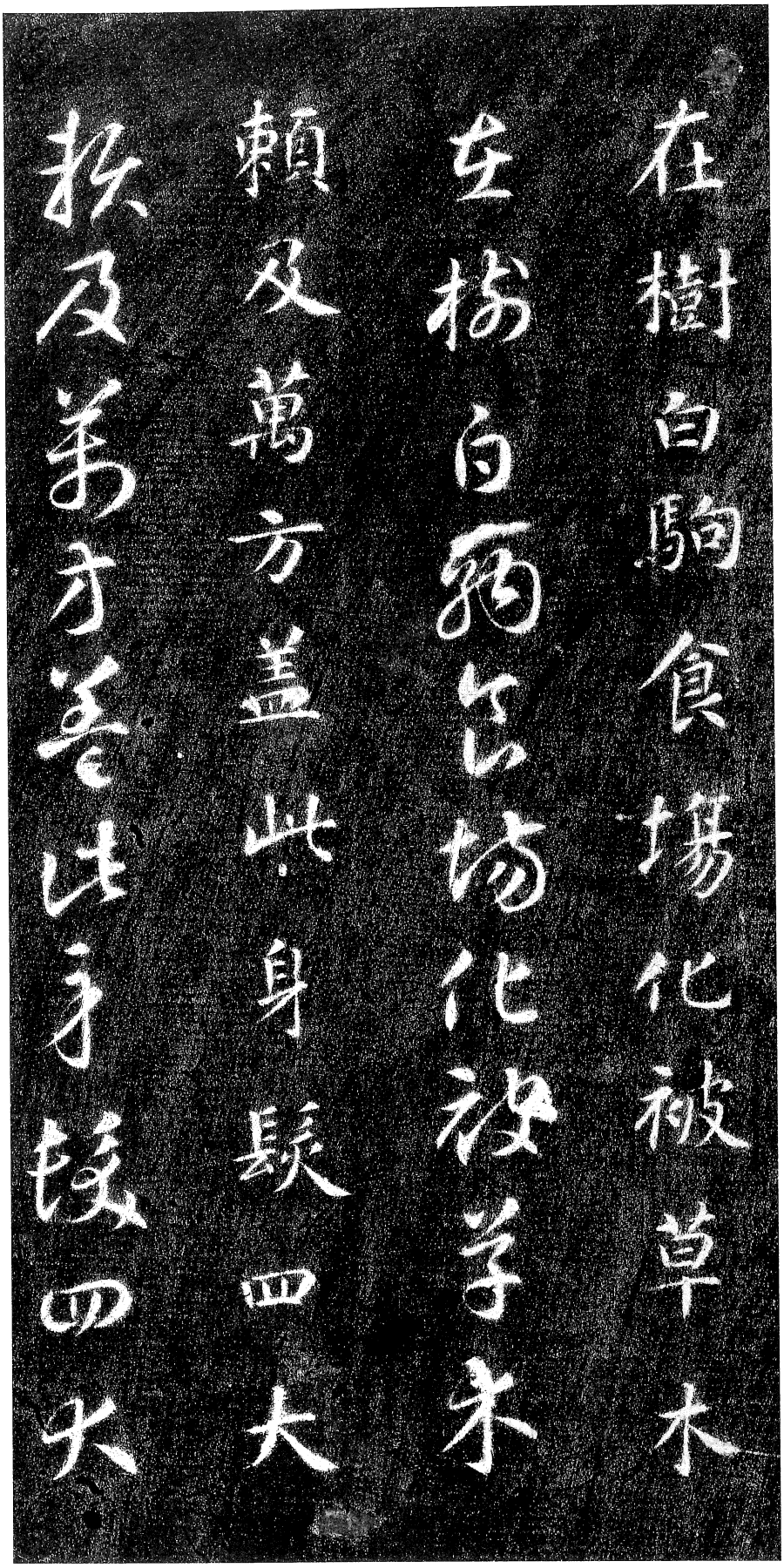
讓國。有虞陶唐。弔民伐罪。周發殷湯。坐朝問道。垂拱

国を譲るは、有虞と陶唐なり。民を弔い罪を伐つは、周発と殷湯なり。朝に坐して道を問い、乗拱し



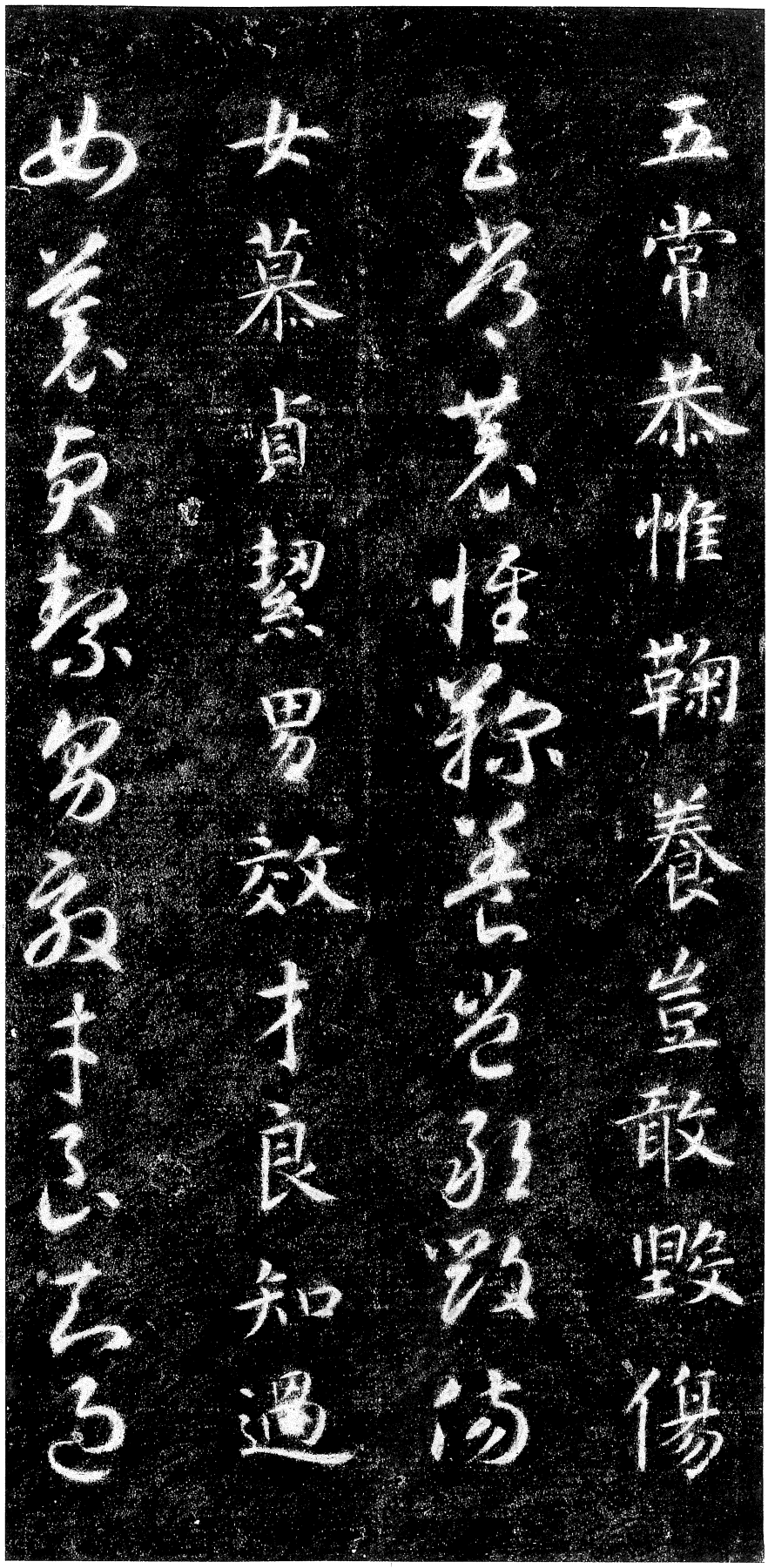
平章。愛育黎首。臣伏戎羌。遐迩壹體。率賓歸王。鳴鳳

平章す。黎首を愛育し、戎羌を臣伏せしむ。遐邇（かじ）体（たい）を壹（いつ）にし、率賓（そつひん）して王に帰（き）す。鳴鳳（めいほう）は



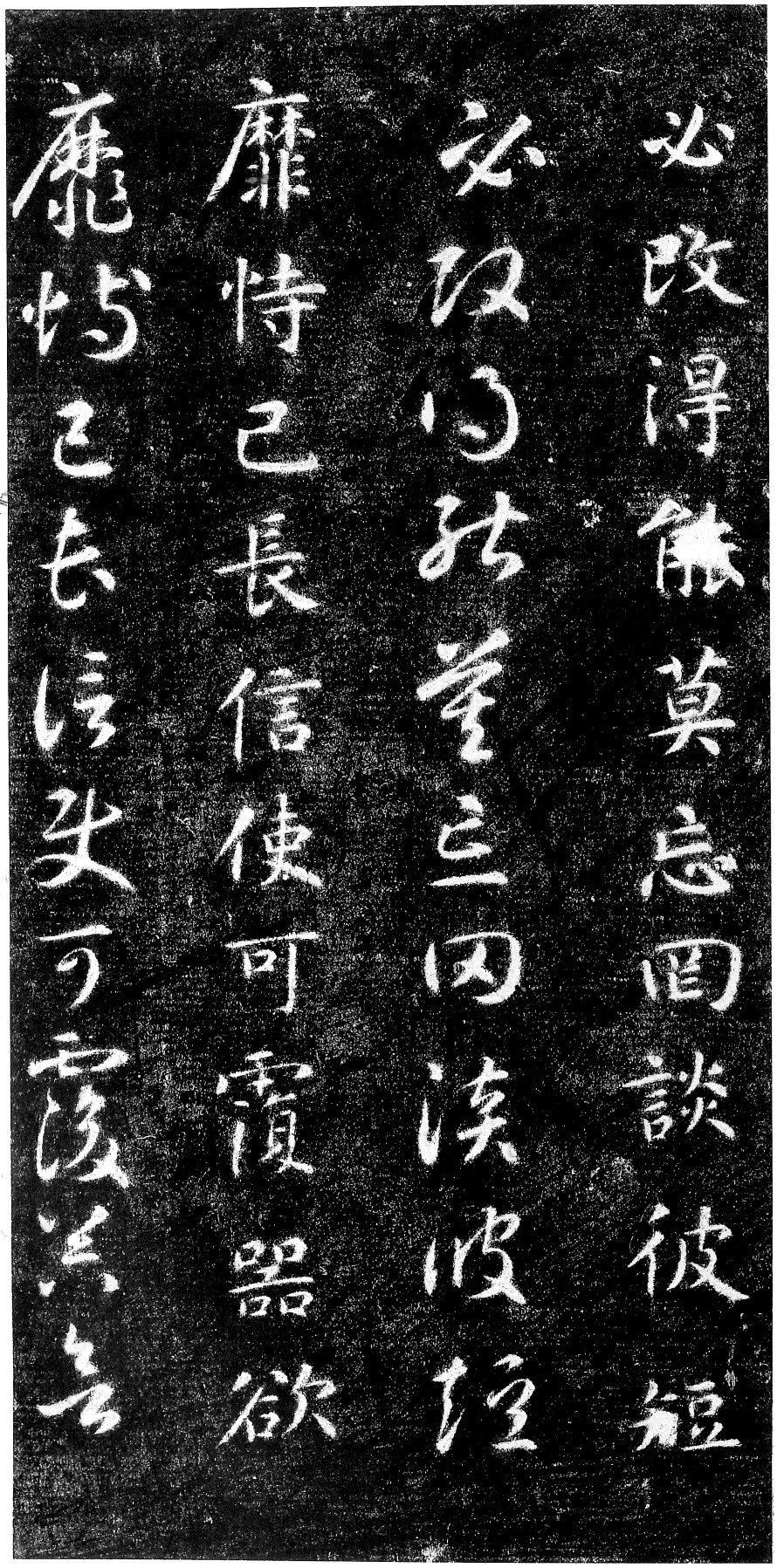
在樹。白駒食場。化被草木。賴及萬方。蓋此身髮。四大

樹に在り、白駒は場に食む。化は草木を被い、賴は万方に及ぶ。蓋し此の身髮は、四大



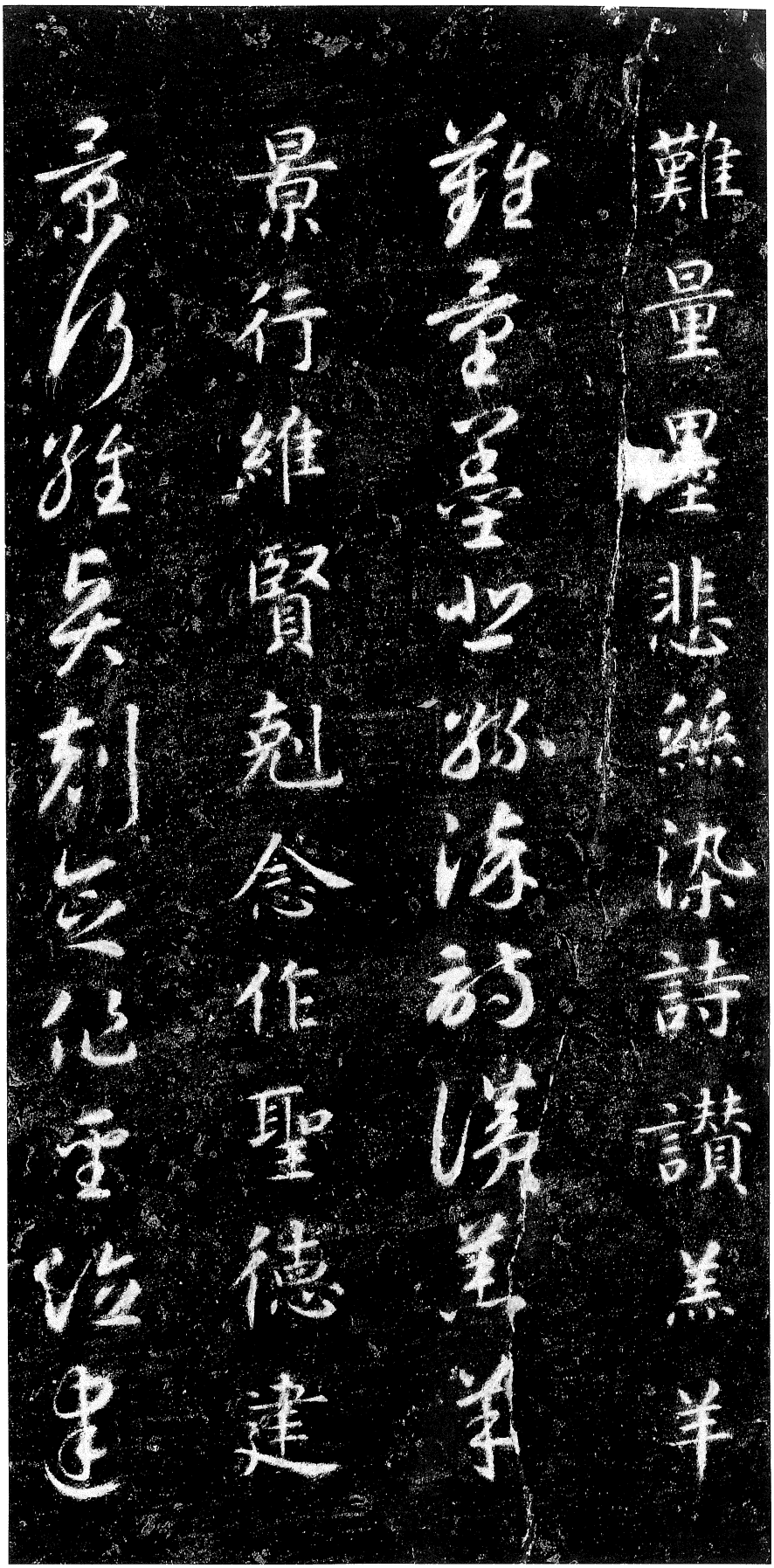
五常。恭惟鞠養。豈敢毀傷。女慕貞絜。男效才良。知過

五常なり。恭しく鞠養を惟えば、豈に敢えて毀傷せんや。女は貞潔を慕い、男は才良に効え。過ちを知らば



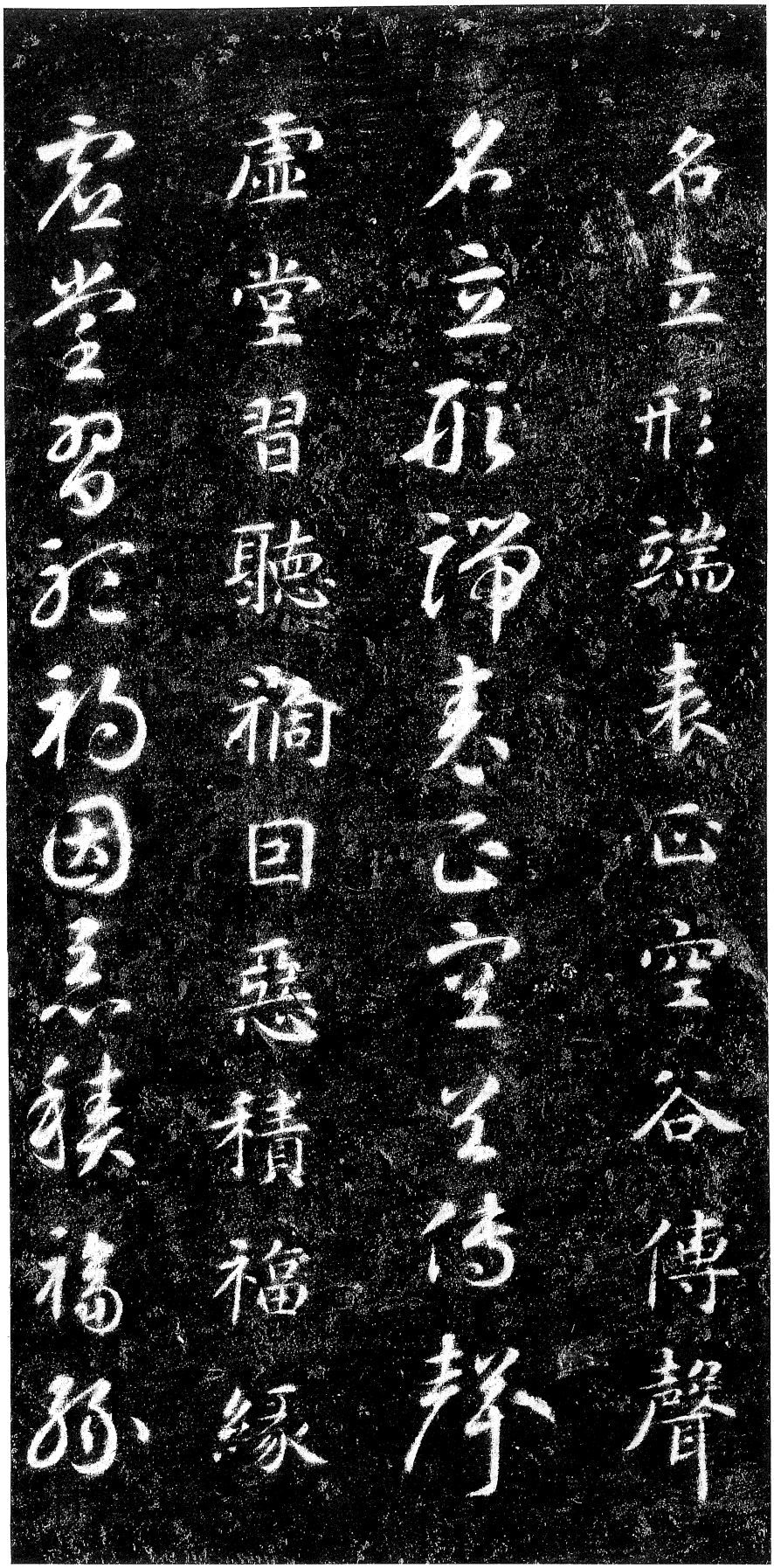
必改。得能莫忘。罔談彼短。靡恃己長。信使可覆。器欲

必ず改め、能くすることを得て忘る莫かれ。彼の短を談ずる罔かれ、己が長を恃む靡かれ。信は覆む可からしめ、器は



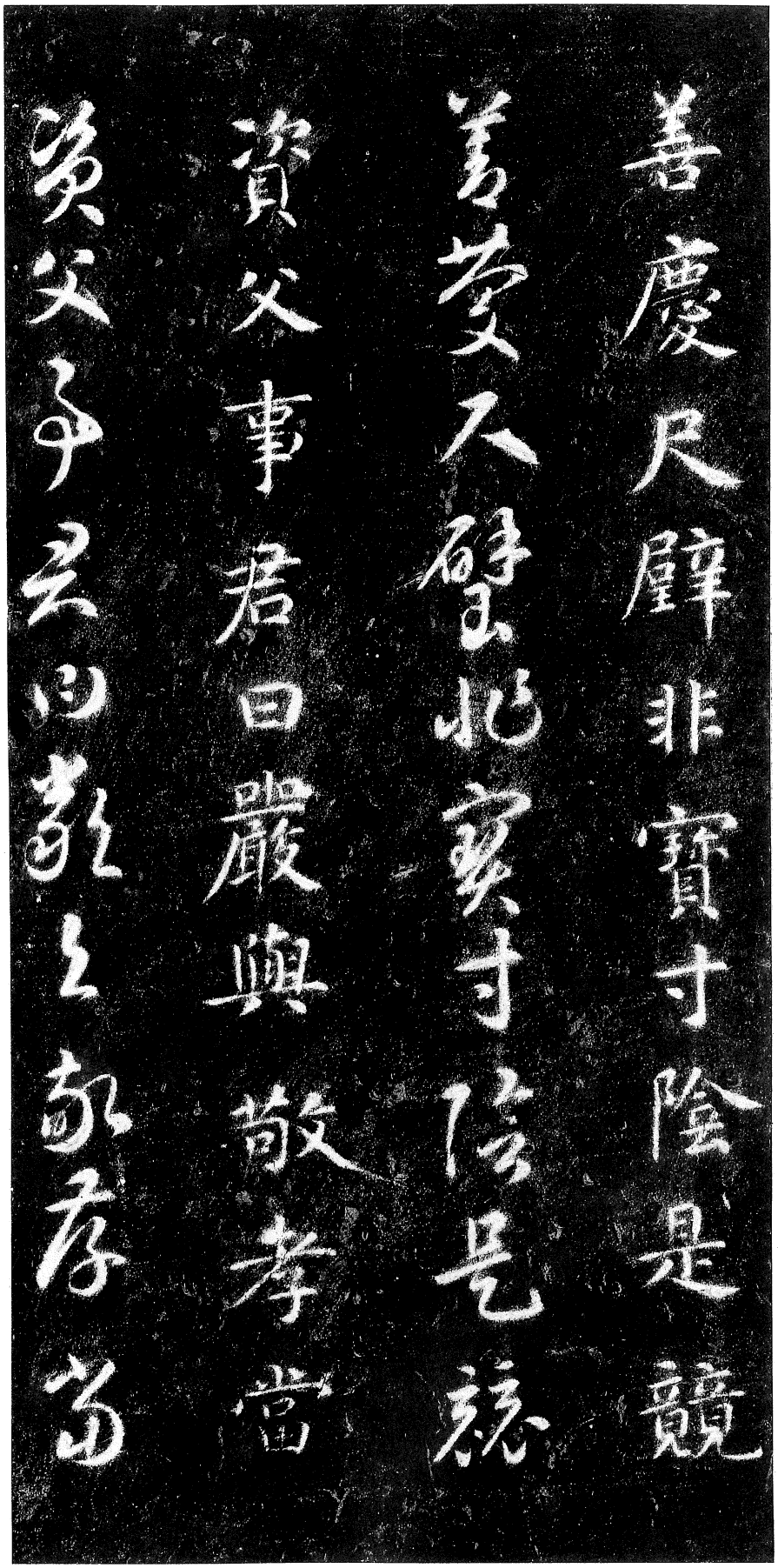
難量。墨悲絲染。詩讚羔羊。景行維賢。剋念作聖。德建

量り難からんことを〔欲す〕。墨は絲の染まるを悲しみ、詩には羔羊を讃せり。景行あるは維れ賢なり、剋く念えば聖と作る。德建てば



名立。形端表正。空谷傳聲。虛堂習聽。禍因惡積。福緣

名立ち、形端しければ表正し。空谷に声を伝え、虛堂に習聴す。禍は悪積に因り、福は

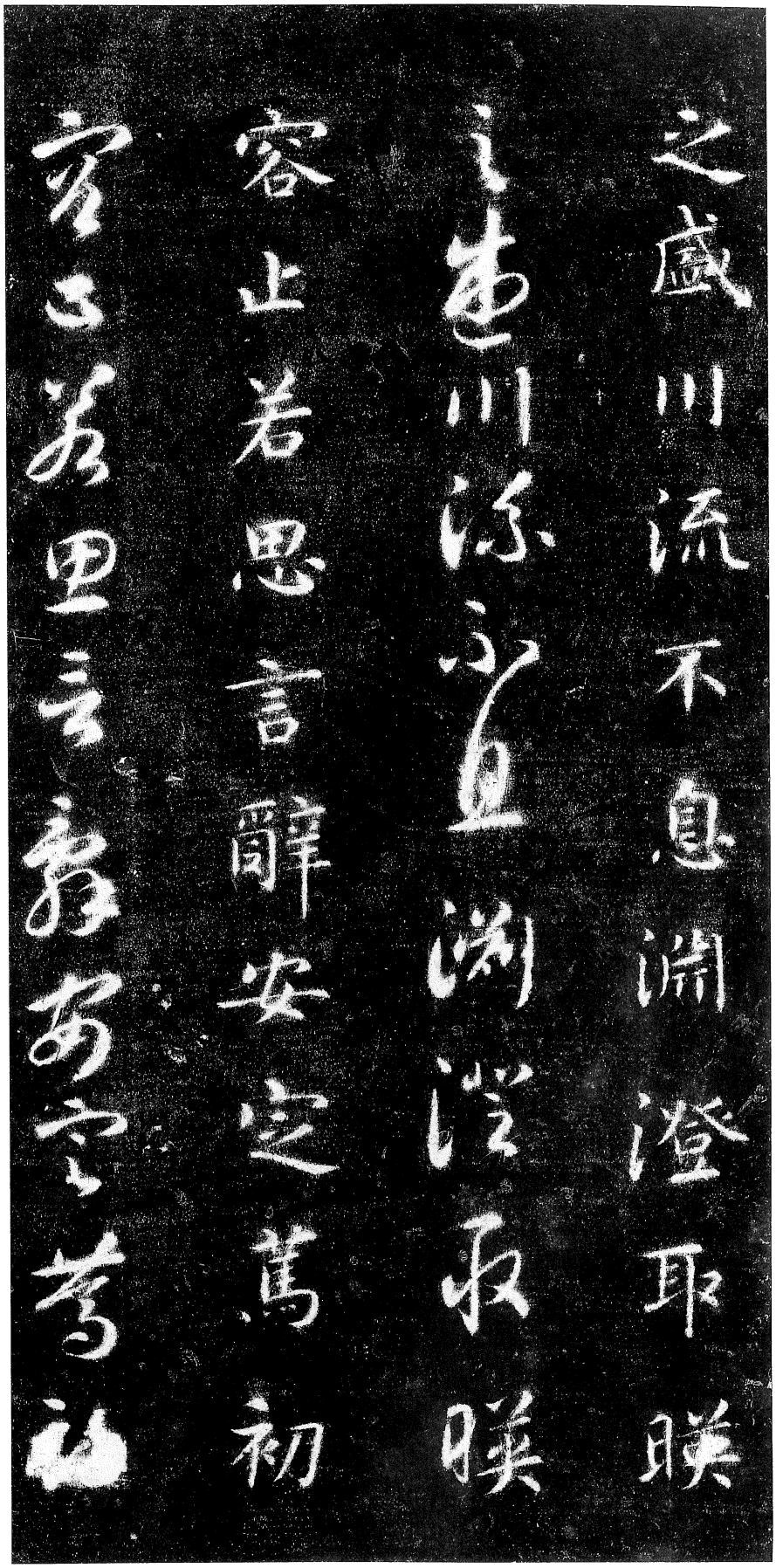


善慶。尺璧非寶。寸陰是競。資父事君。曰嚴與敬。孝當

善慶に〔縁る〕。尺璧は宝に非ず、寸陰を是れ競うべし。父に資り君に事うるに、曰く厳と敬。孝は当に

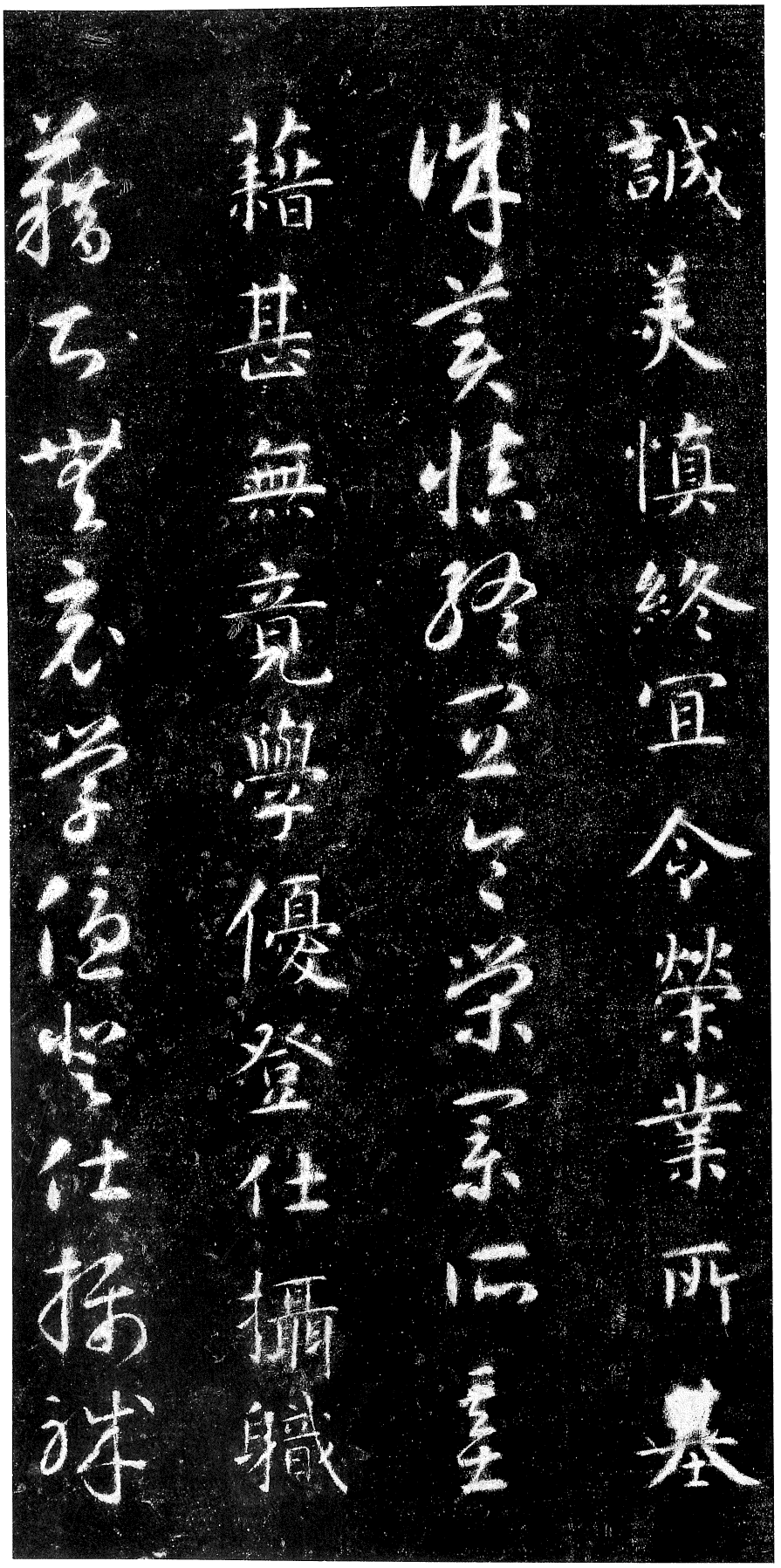
竭力。忠則盡命。臨深履薄。夙興溫清。似蘭斯馨。如松

力を竭くすべし、忠は則ち命を尽くせ。深きに臨んで薄きを履むごとく、夙に興きて温凊せよ。蘭の斯れ馨しきに似、松(の盛んなるが)如し。



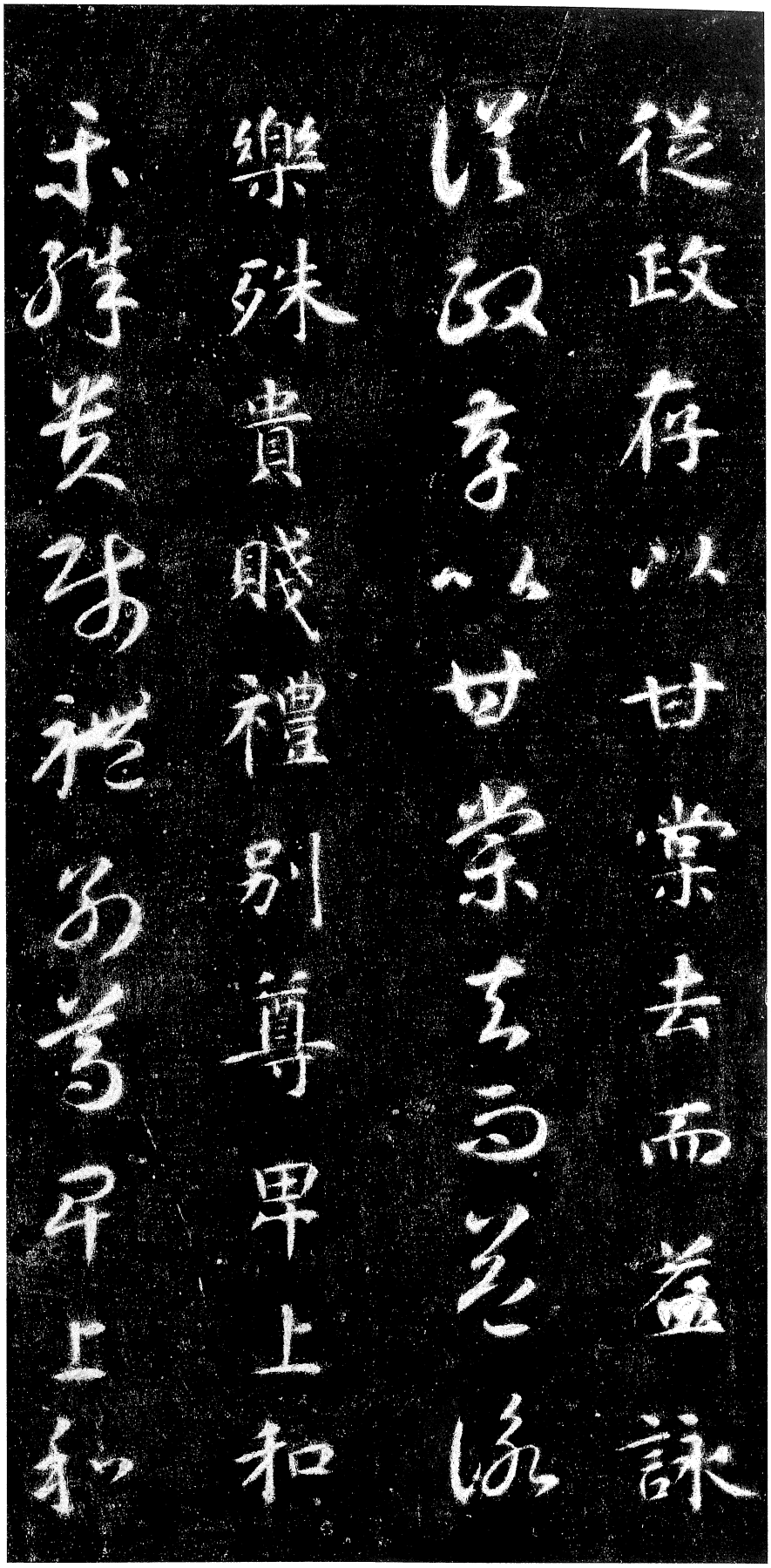
之盛。川流不息。淵澄取暎。容止若思。言辭安定。篤初

川は流れて息まず、淵は澄んで映を取る。容止は思うが若く、言辞は安定にせよ。初めを篤くするは



誠美。慎終宜令。榮業所基。藉甚無竟。學優登仕。攝職

誠に美し、終わりを慎むは宜しく令しかるべし。栄業の基とする所、藉甚にして竟わり無し。学に優れば登仕し、職を摂りて

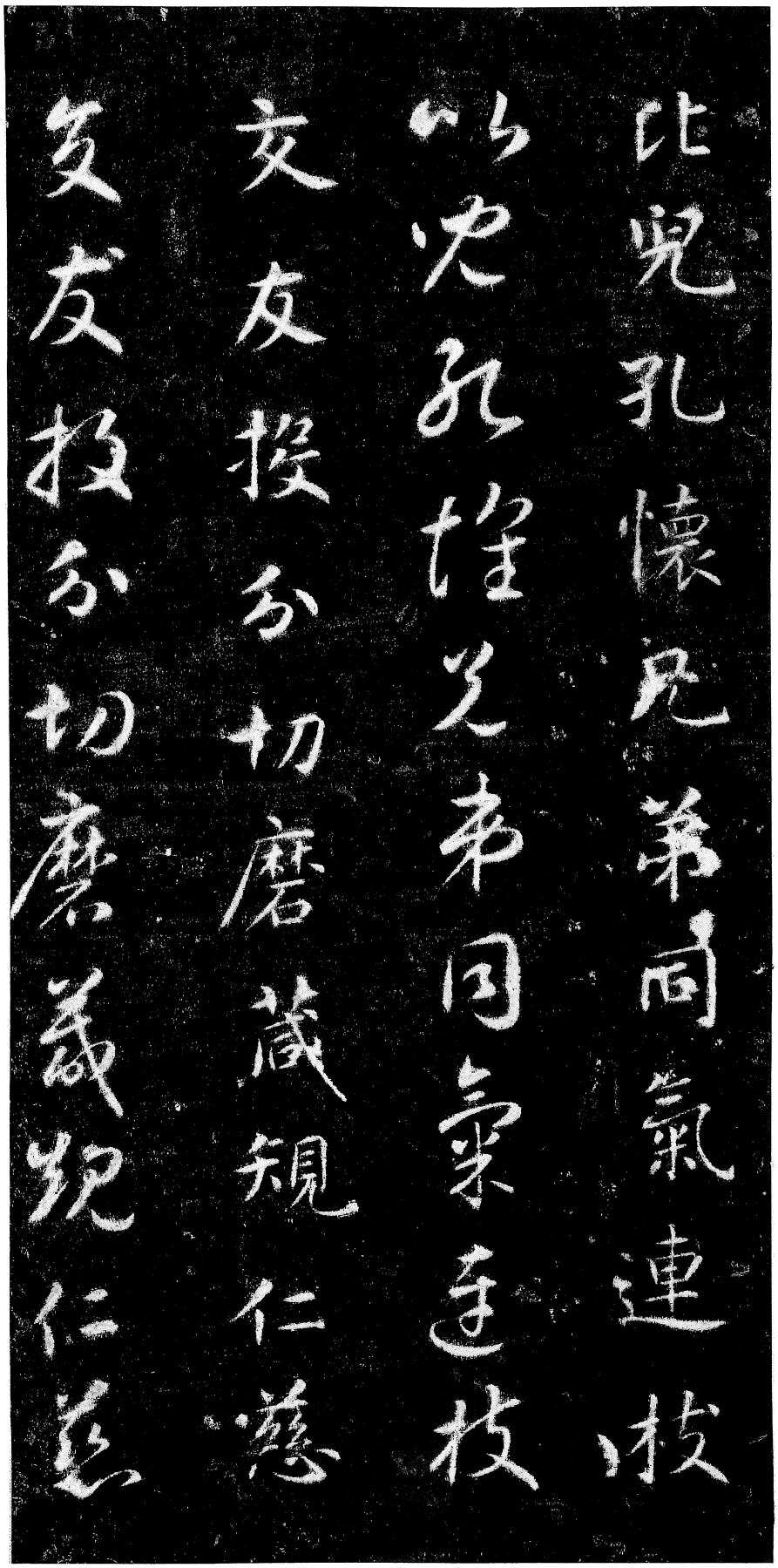


從政。存以甘棠。去而益詠。樂殊貴賤。禮別尊卑。上和

政に従う。存するに甘棠を以てし、去りて益ます詠ぜらる。楽は貴賤を殊にし、礼は尊卑を別かつ。上和らげば

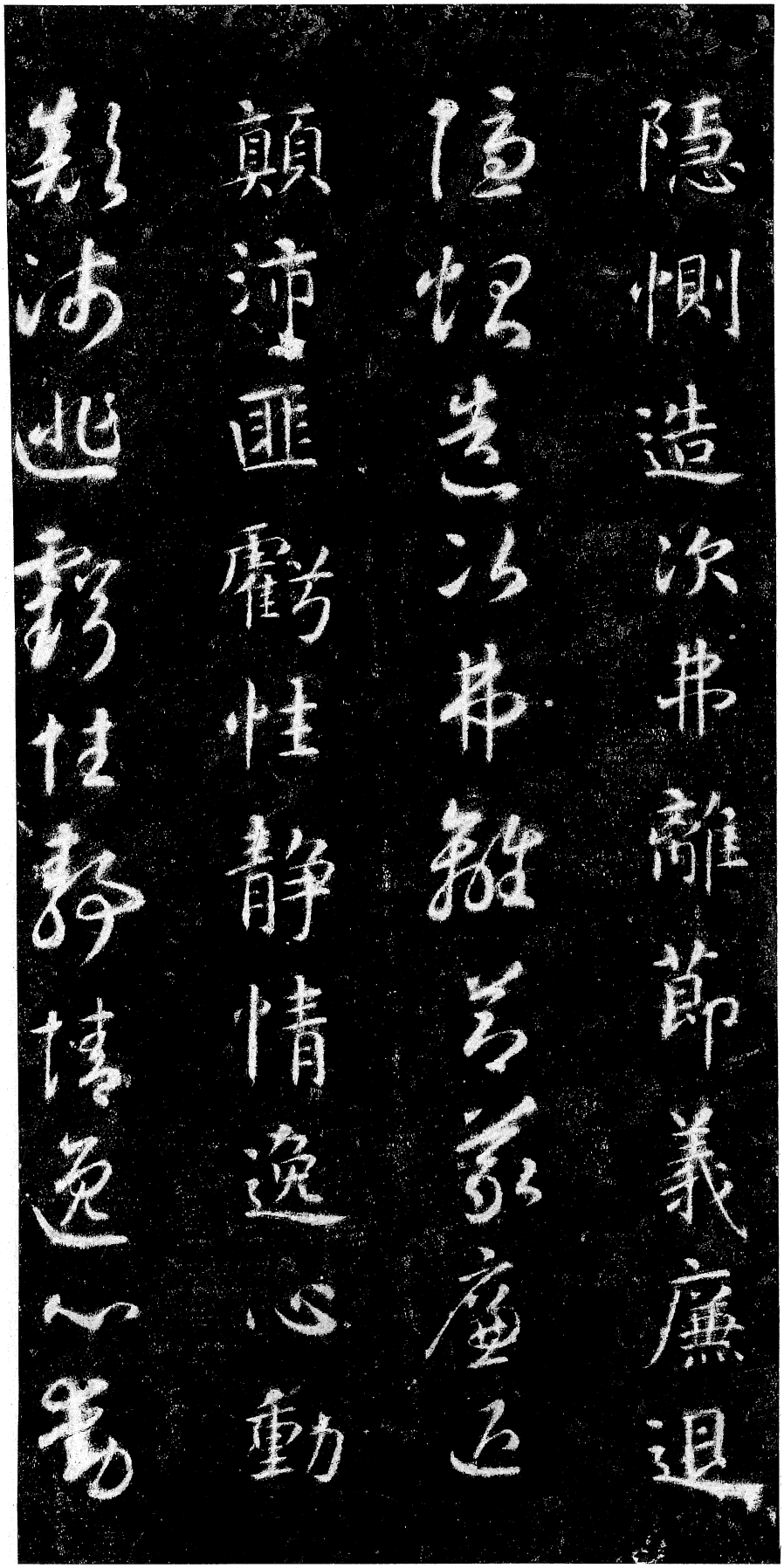
下睦。夫唱婦隨。外受傅訓。入奉母儀。諸姑伯叔。猶子

下睦まじく、夫唱えれば婦随う。外にては傅訓を受け、入りては母儀を奉ず。諸姑伯叔あり、猶子



比兒。孔懷兄弟。同氣連枝。交友投分。切磨箴規。仁慈

児に比す。孔だ懐うは兄弟なり、気を同じうし枝を連ぬ。友に交わるに分を投じ、切磨箴規せよ。仁慈

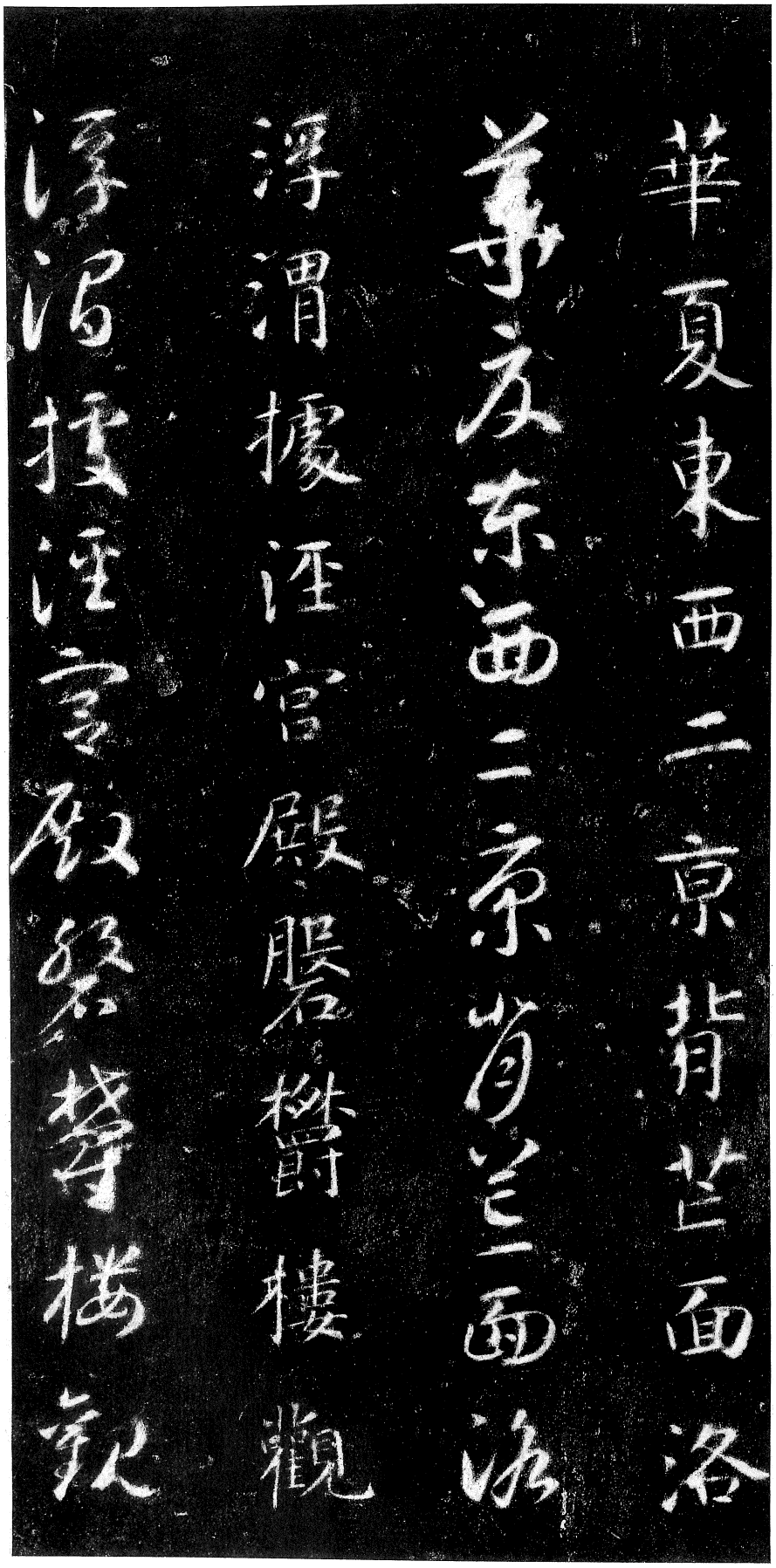


隱惻。造次弗離。節義廉退。顛沛匪虧。性靜情逸。心動

隱惻は、造次にも離れず、節義廉退は、顛沛にも虧けざれ。性靜かなれば情逸し、心動けば

神疲。守眞志滿。逐物意移。堅持雅操。好爵自縻。都邑

神疲る。真を守れば志満ち、物を逐えば意移る。雅操を堅持すれば、好爵自ずから縻う。都邑は

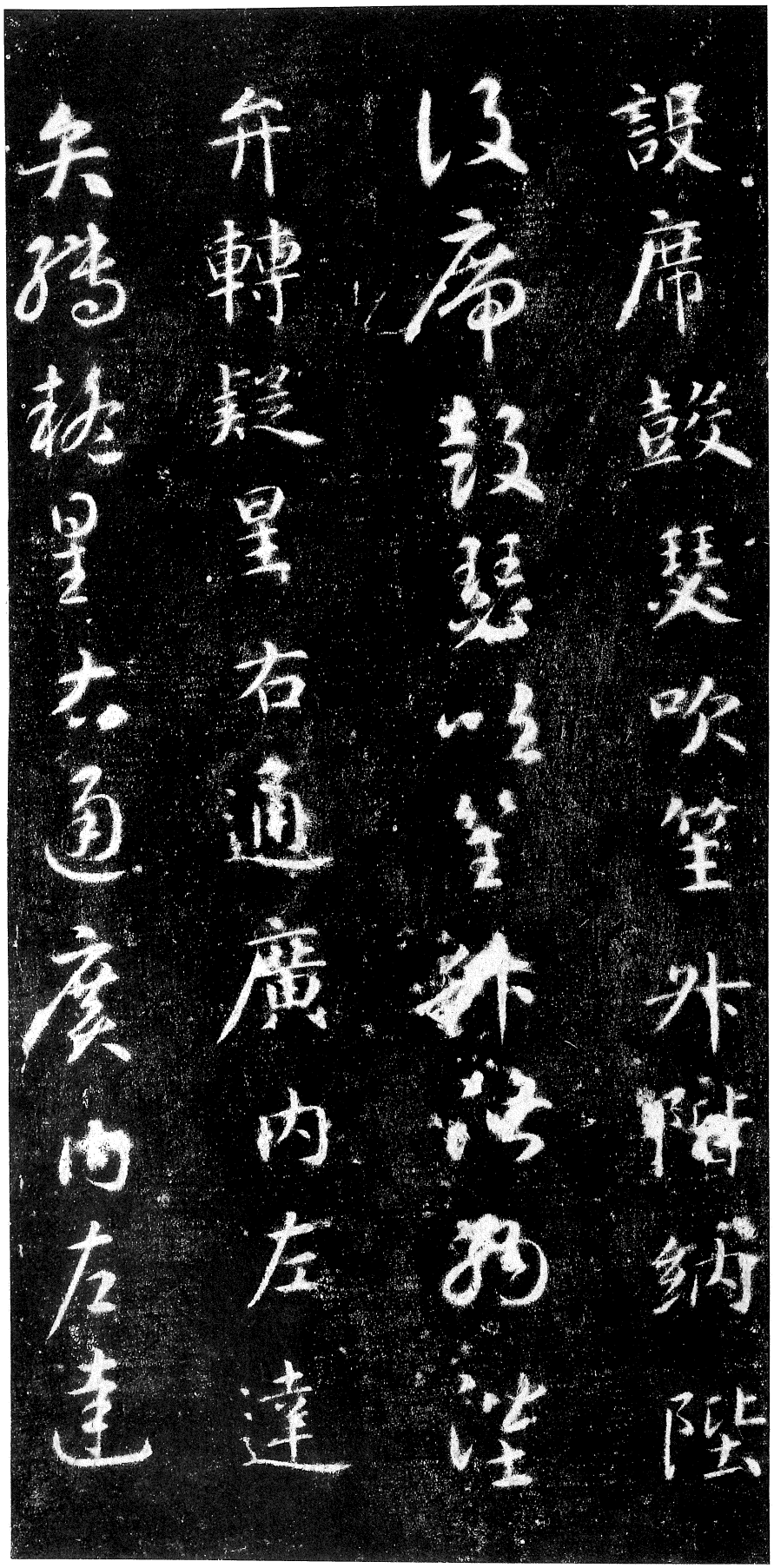


華夏。東西二京。背芒面洛。浮渭據涇。宮殿盤欝。樓観

華夏に、東西二京あり。芒を背にし洛に面し、渭に浮かび涇に拠る。宮殿盤鬱とし、楼観

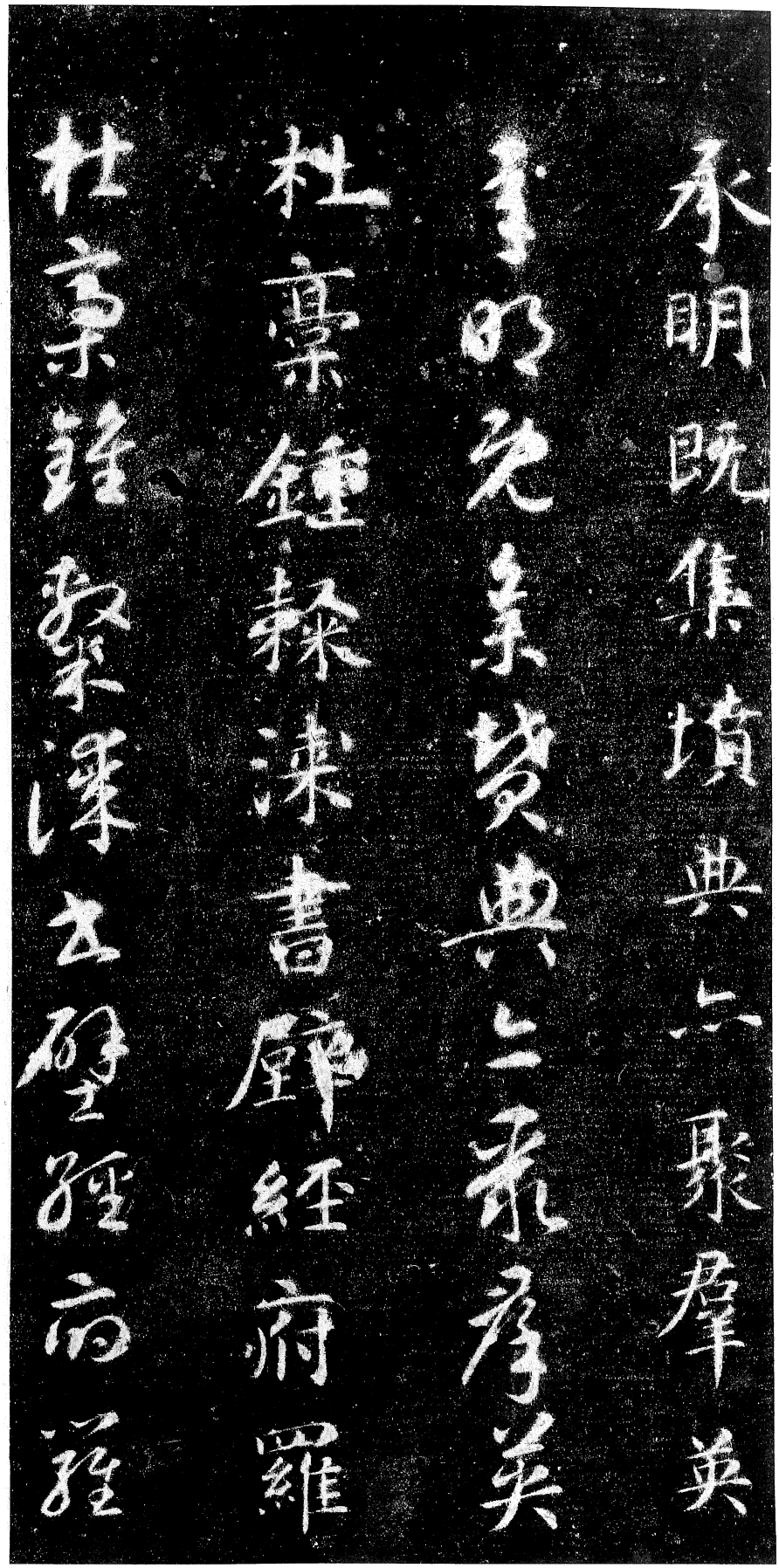
飛驚。圖寫禽獸。畫綵仙靈。丙舍傍啓。甲帳對楹。肆筵

飛驚す。禽獸を図写し、仙霊を画綵す。丙舍傍らに啓け、甲帳対楹あり。筵を肆べ

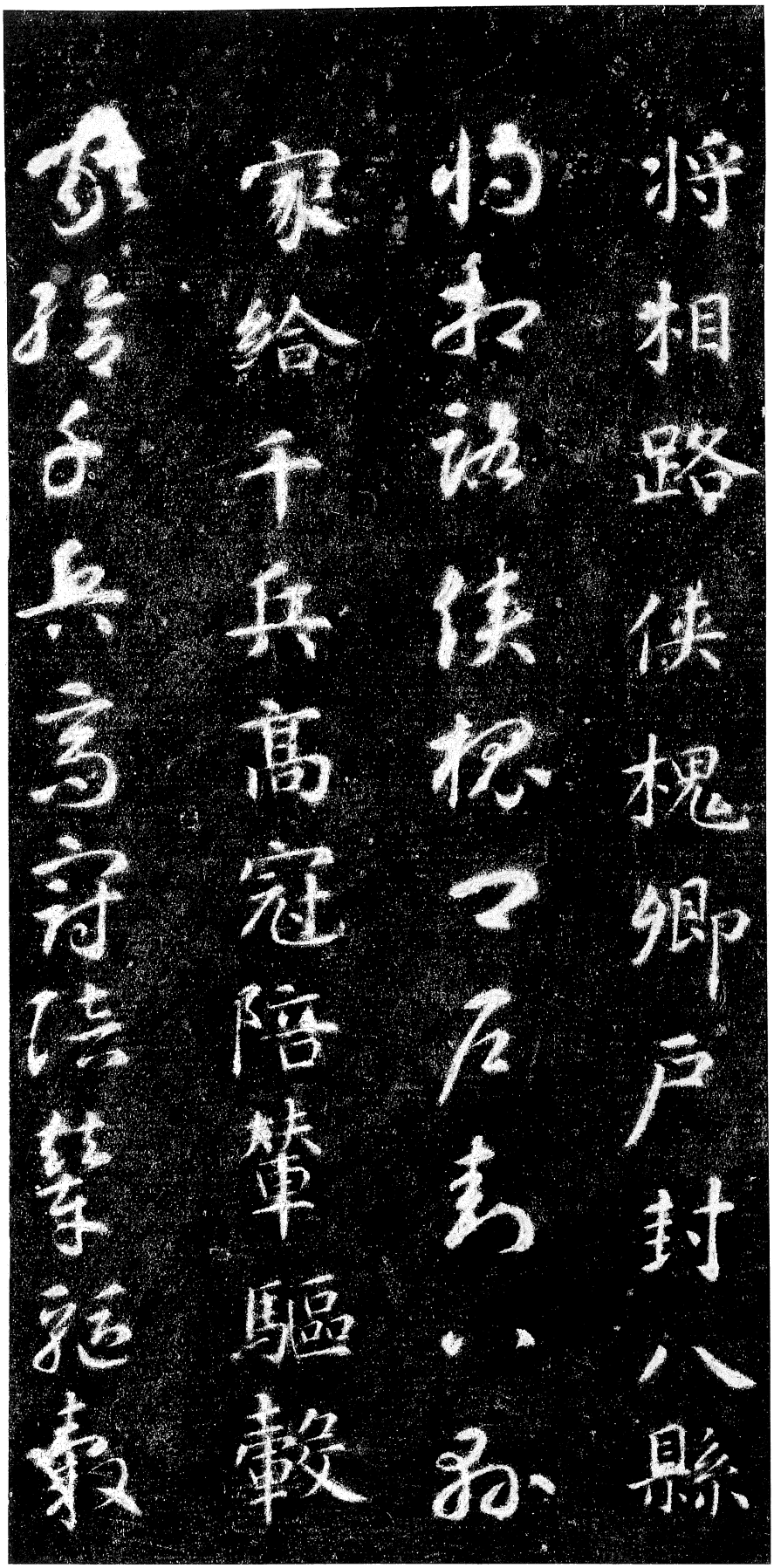


設席。鼓瑟吹笙。升階納陛。弁轉疑星。右通廣内。左達

席を設け、瑟を鼓し笙を吹く。階に升り陛に納るに、弁転して星かと疑う。右は広内に通じ、左は〔承明に〕達す。

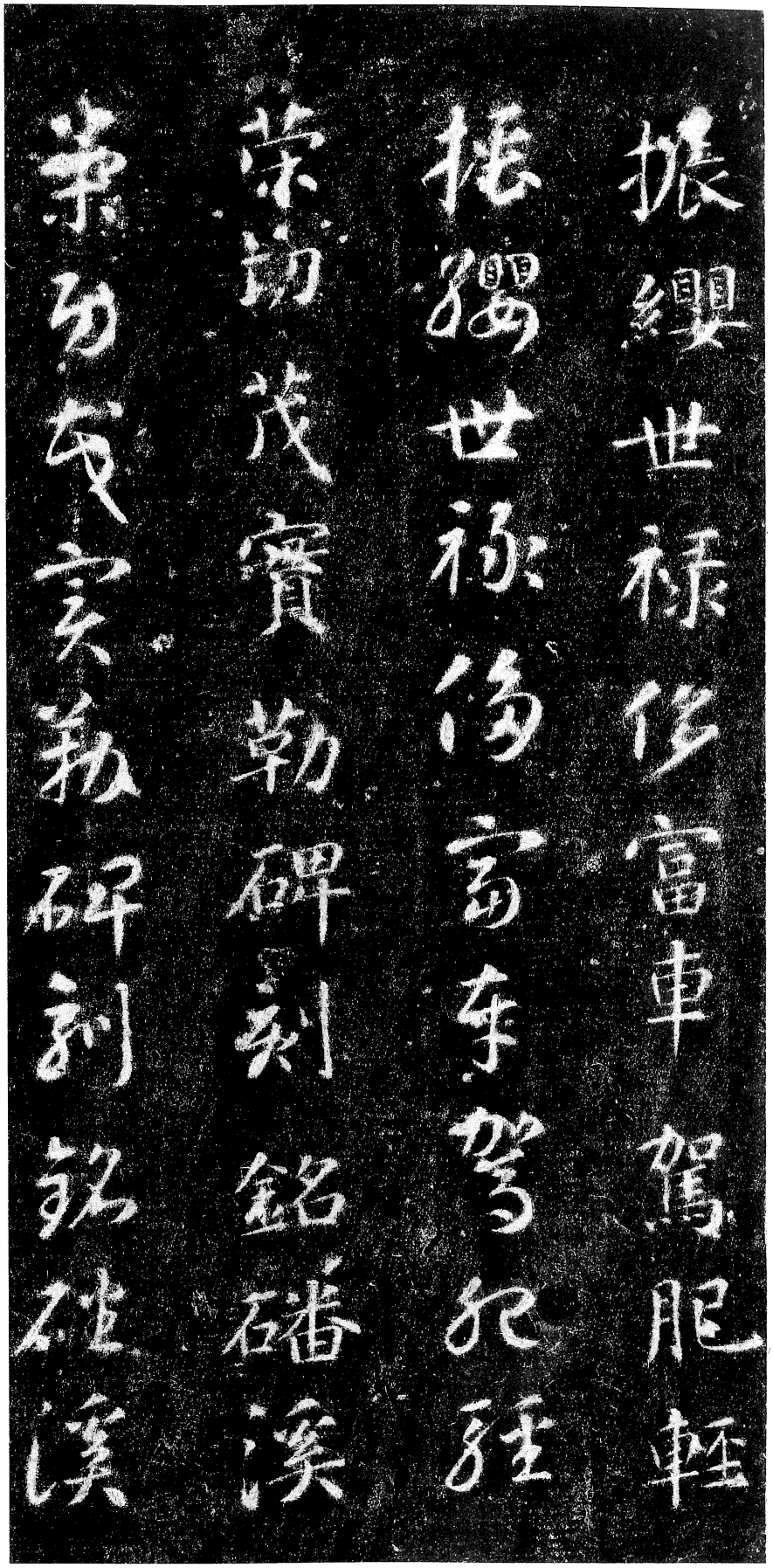


承明。既集墳典。亦聚羣英。杜稾鍾隸。漆書壁經。府羅
既に墳典を集め、亦た群英を聚む。杜稾鍾隸、漆書壁経あり。府には〔将相〕羅なり、



將相。路侠槐卿。戸封八縣。家給千兵。高冠陪輦。驅轂

路は槐卿に侠まれり。戸は八県に封ぜられ、家には千兵を給す。高冠 輦に陪し、轂を駆り



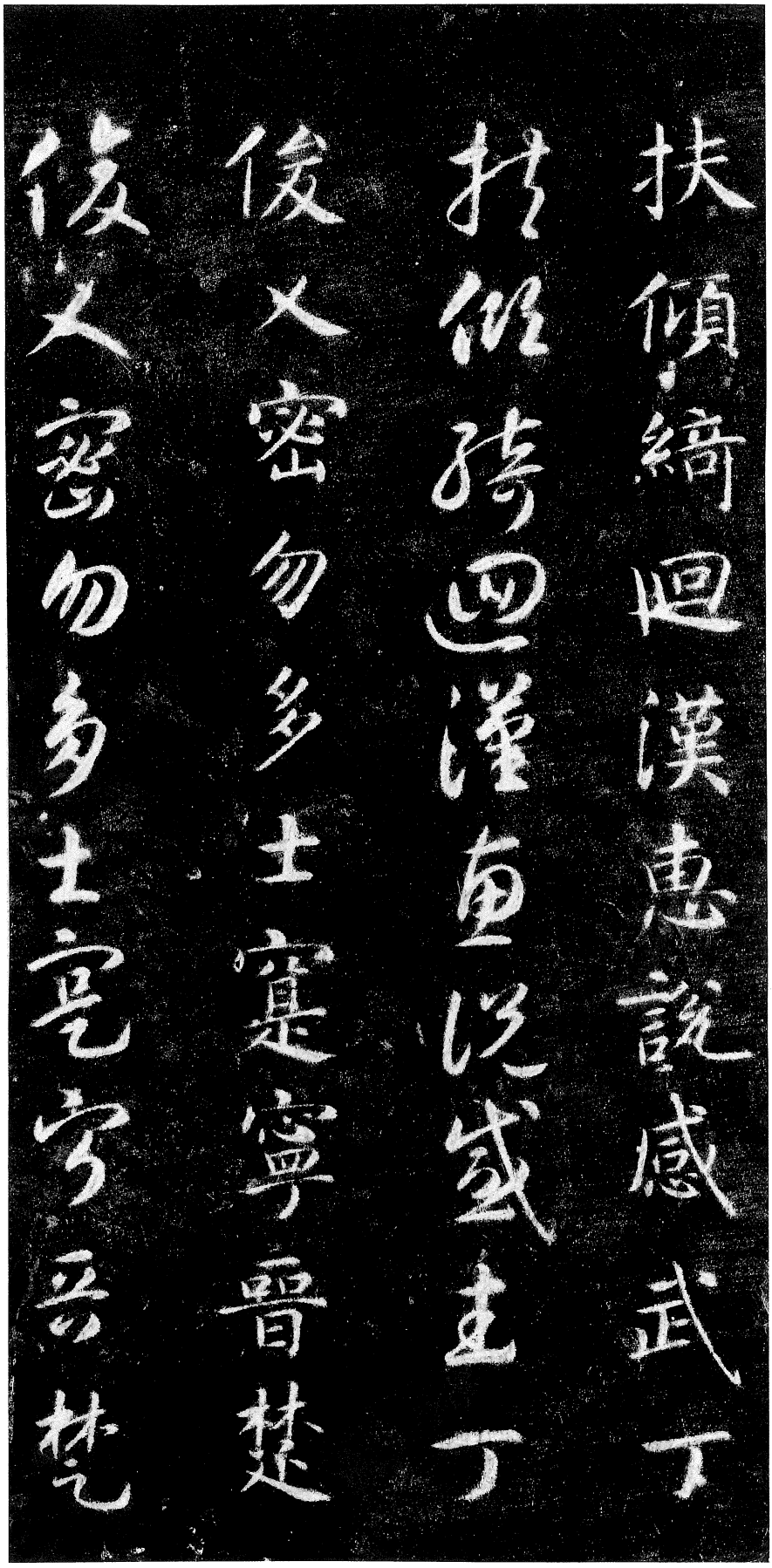
振纓。世祿侈富。車駕肥輕。策功茂實。勒碑刻銘。磻溪

纓を振う。世祿は侈富にして、車駕肥輕あり。策功の茂実なるは、碑に勒して銘に刻す。磻溪と

伊尹佐時阿衡奄宅曲阜
伊尹佐时阿衡奄宅曲阜
微旦孰營桓公匡合濟弱
微旦孰營桓公匡合濟弱

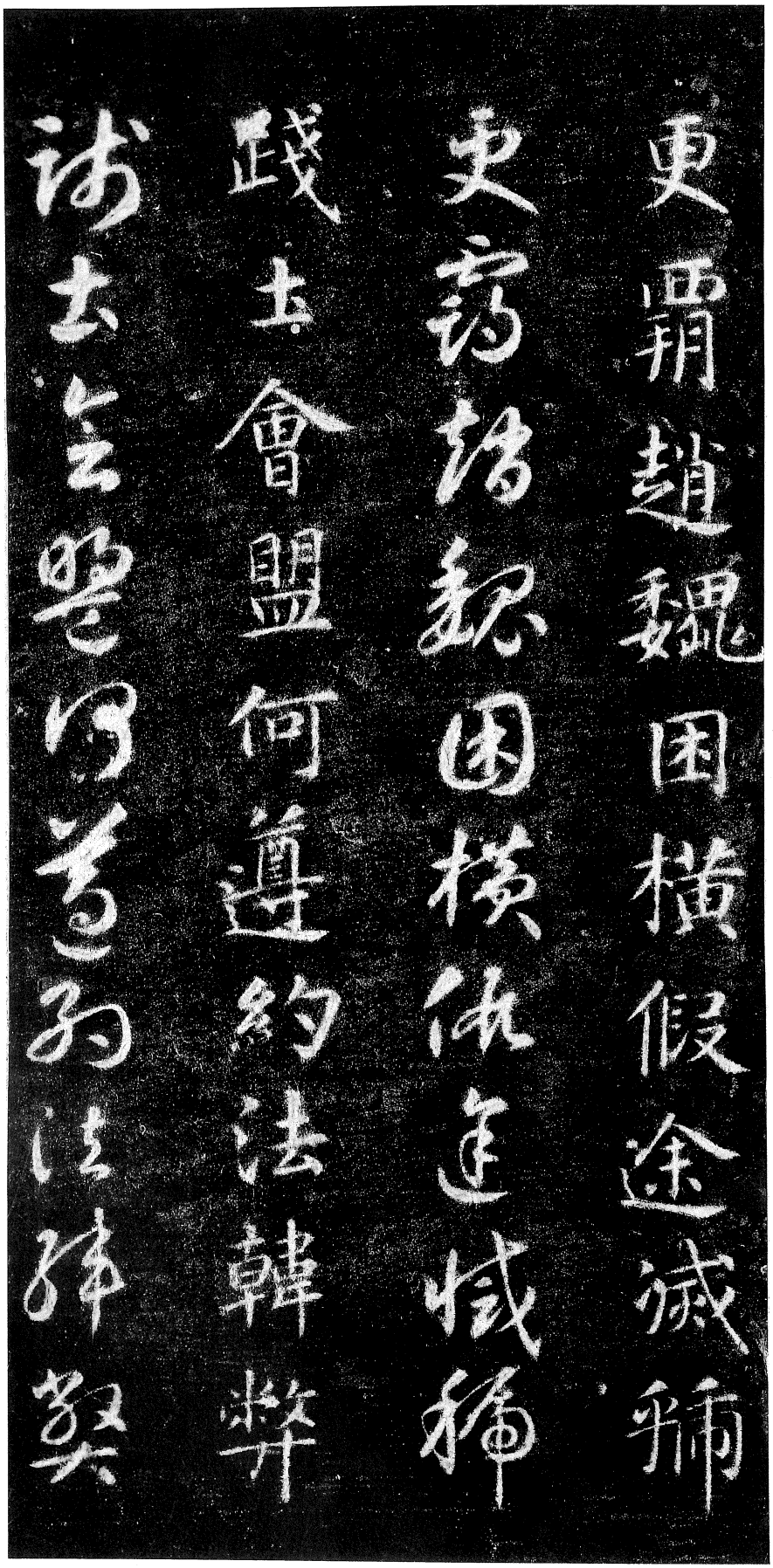
伊尹。佐時阿衡。奄宅曲阜。微旦孰營。桓公匡合。濟弱

伊尹、時を佐け阿衡となる。奄いに曲阜に宅す、旦微かりせば孰か営まん。桓公は匡合し、弱きを済い



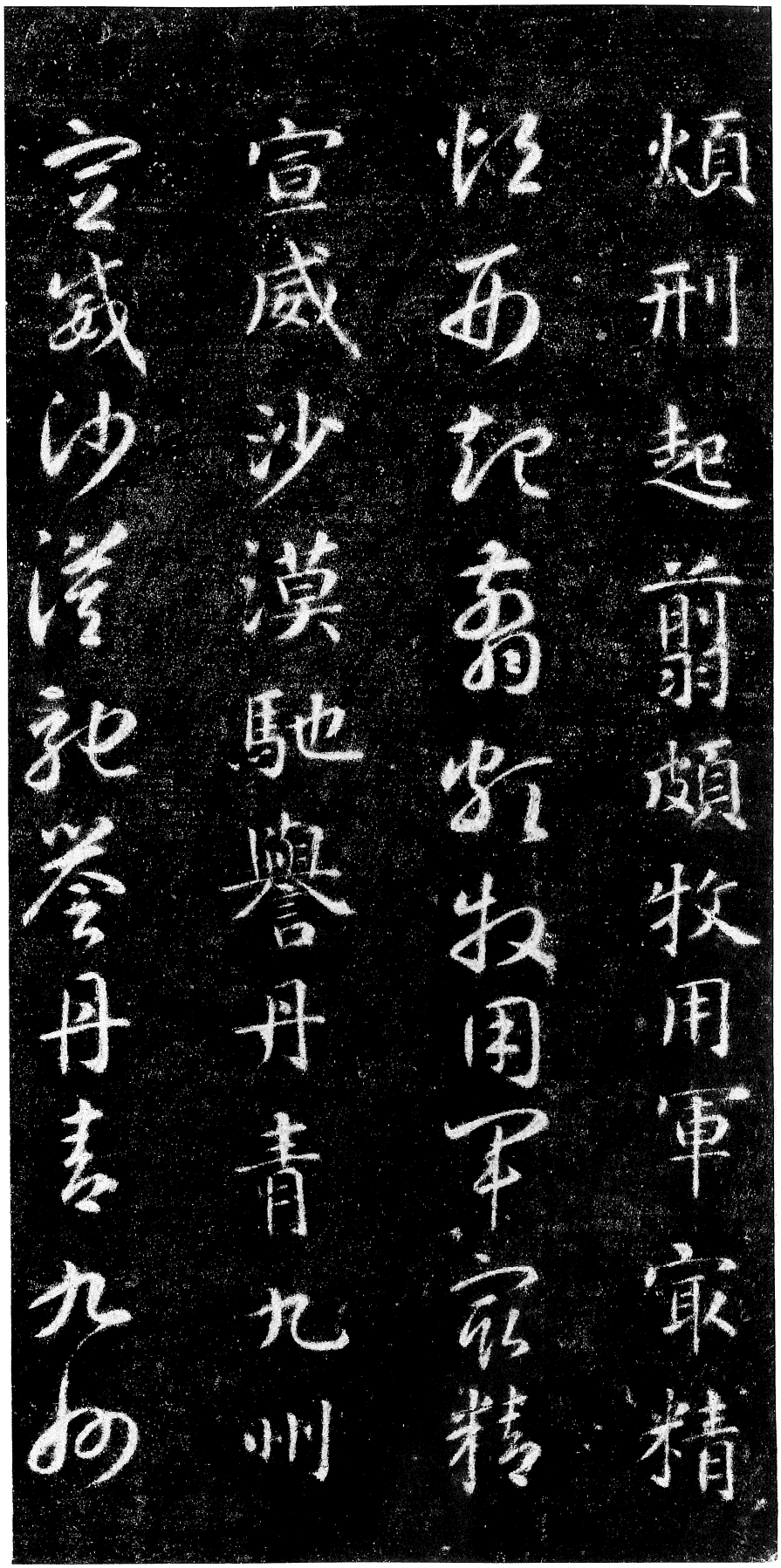
扶傾。綺廻漢惠。說感武丁。俊乂密勿。多士寔寧。晉楚

傾けるを扶く。綺は漢惠を廻し、說は武丁を感ぜしむ。俊乂密勿して、多士により寔に寧し。晉楚は



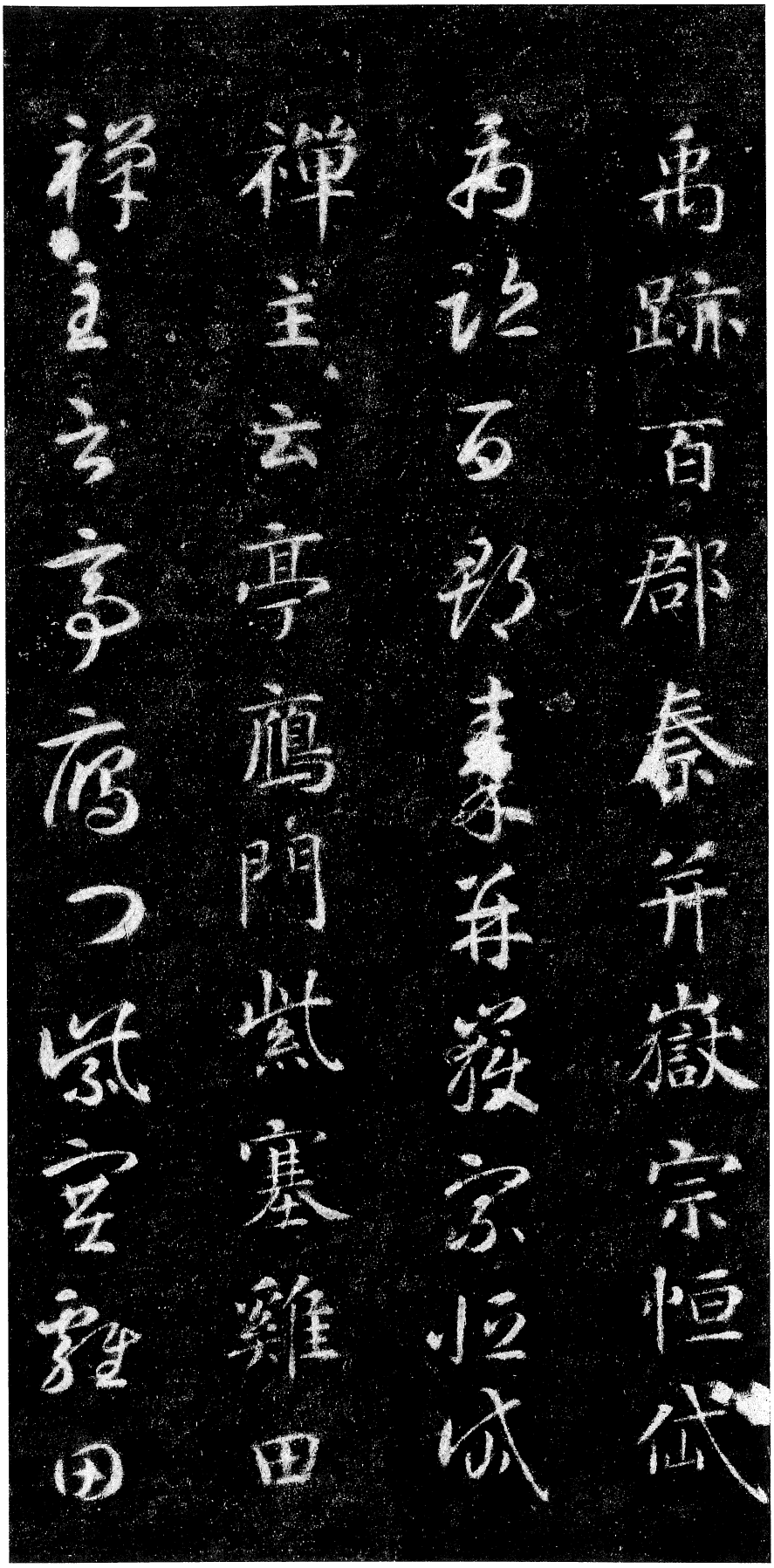
更覇。趙魏困横。假途滅虢。踐土會盟。何遵約法。韓弊

更ごも覇たり、趙魏は横に困しむ。途を仮りて虢を滅ぼし、踐土に会盟す。何は約法に遵い、韓は〔煩刑に〕弊れたり。



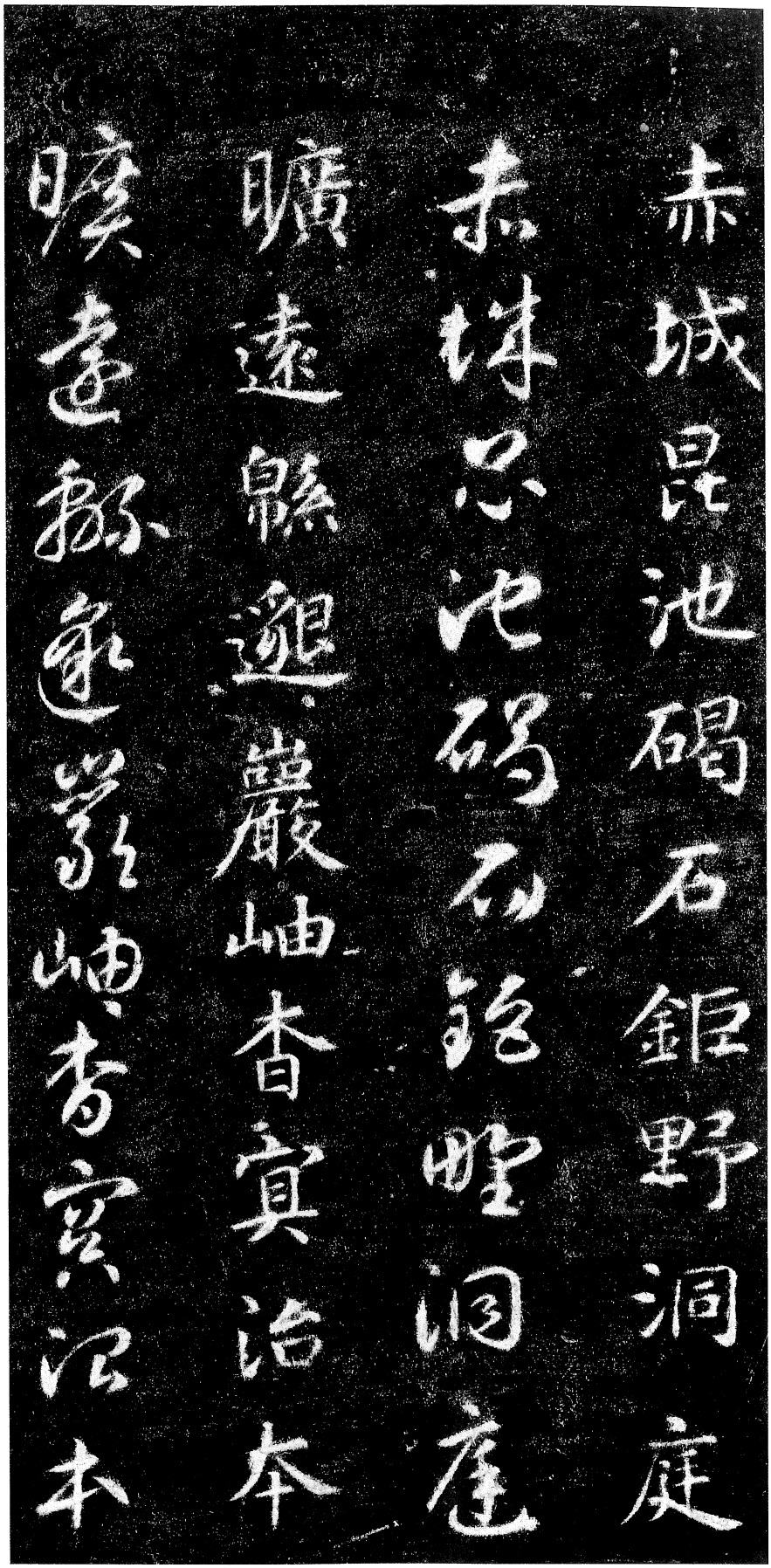
煩刑。起翦頗牧。用軍最精。宣威沙漠。馳譽丹青。九州

起翦頗牧は、軍を用いること最も精し。威を沙漠に宣べ、誉れを丹青に馳す。九州は



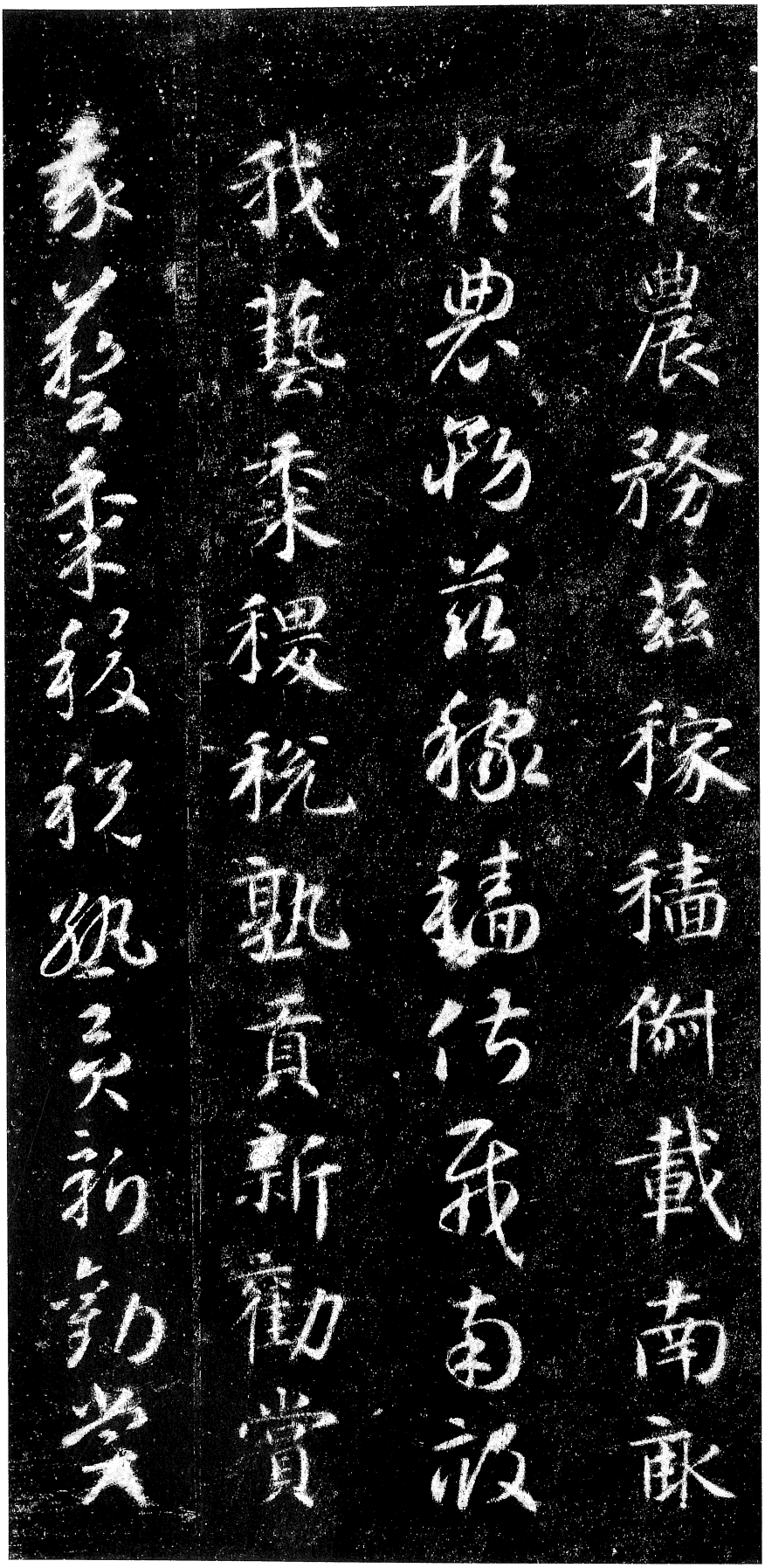
禹跡。百郡秦并。嶽宗恒岱。禪主云亭。鴈門紫塞。雞田

禹の跡なり、百郡は秦の并せたるなり。嶽は恒岱を宗とし、禪は云亭を主とす。雁門、紫塞、雞田、



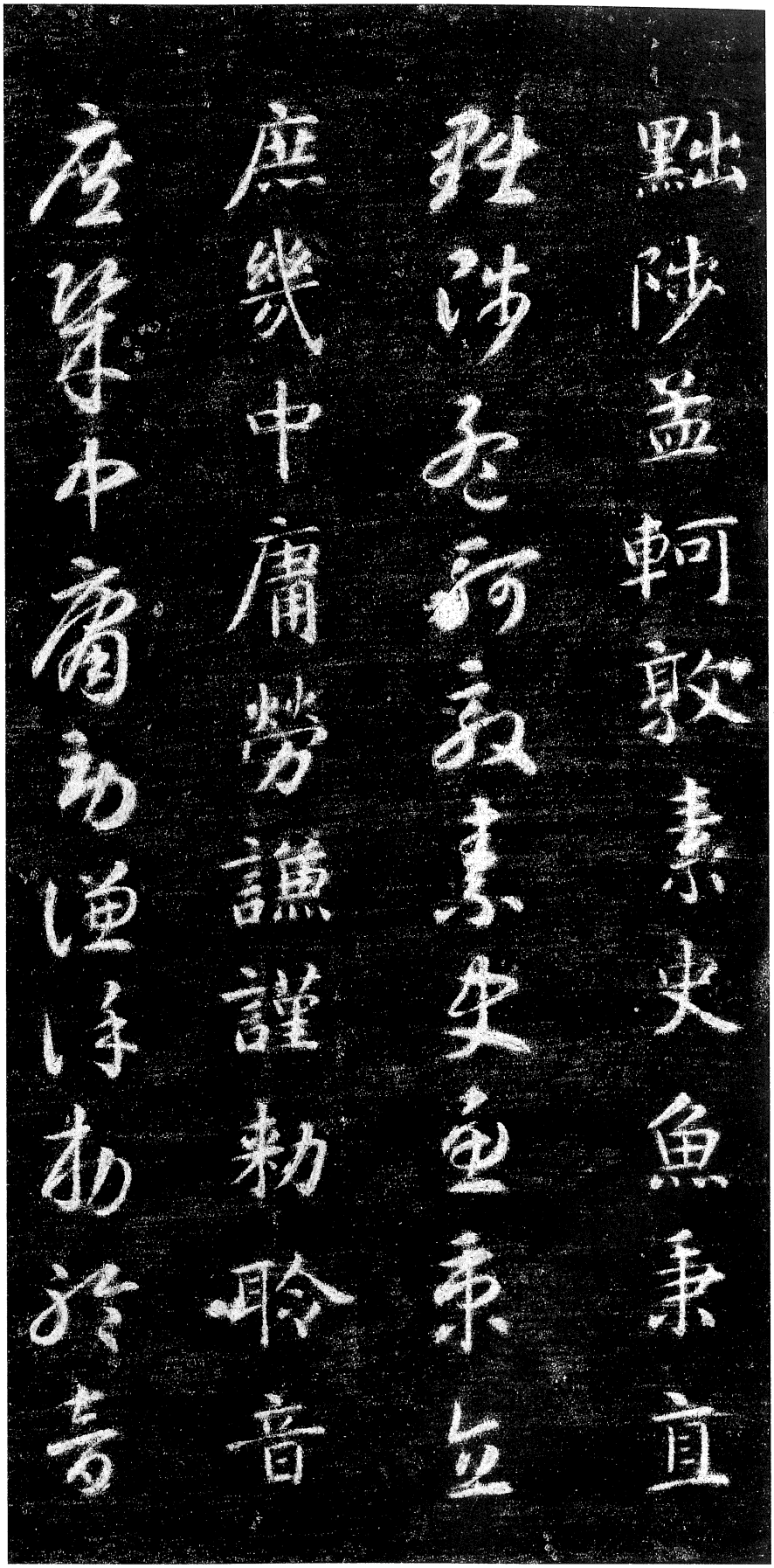
赤城。昆池碣石。鉅野洞庭。曠遠緜邈。巖岫杳冥。治本

赤城。昆池、碣石、鉅野、洞庭。曠遠緜邈として、巖岫杳冥たり。治は〔農を〕本とし、



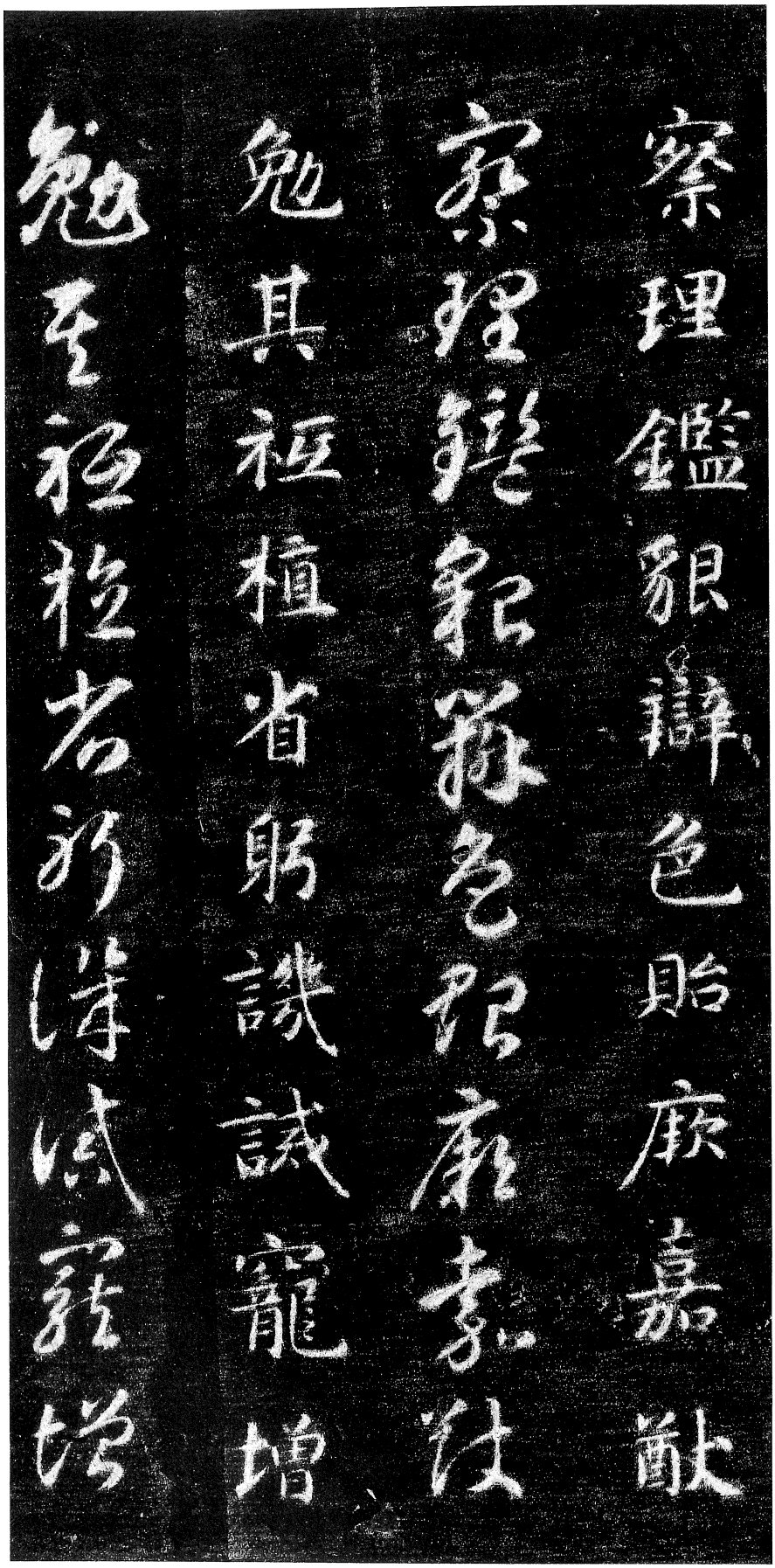
於農。務茲稼穡。倒載南畝。我藝黍稷。稅熟貢新。勸賞

茲の稼穡に務む。倒めて南の畝に載をし、我れ黍稷を藝う。熟せるを稅とし新を貢め、勸賞し



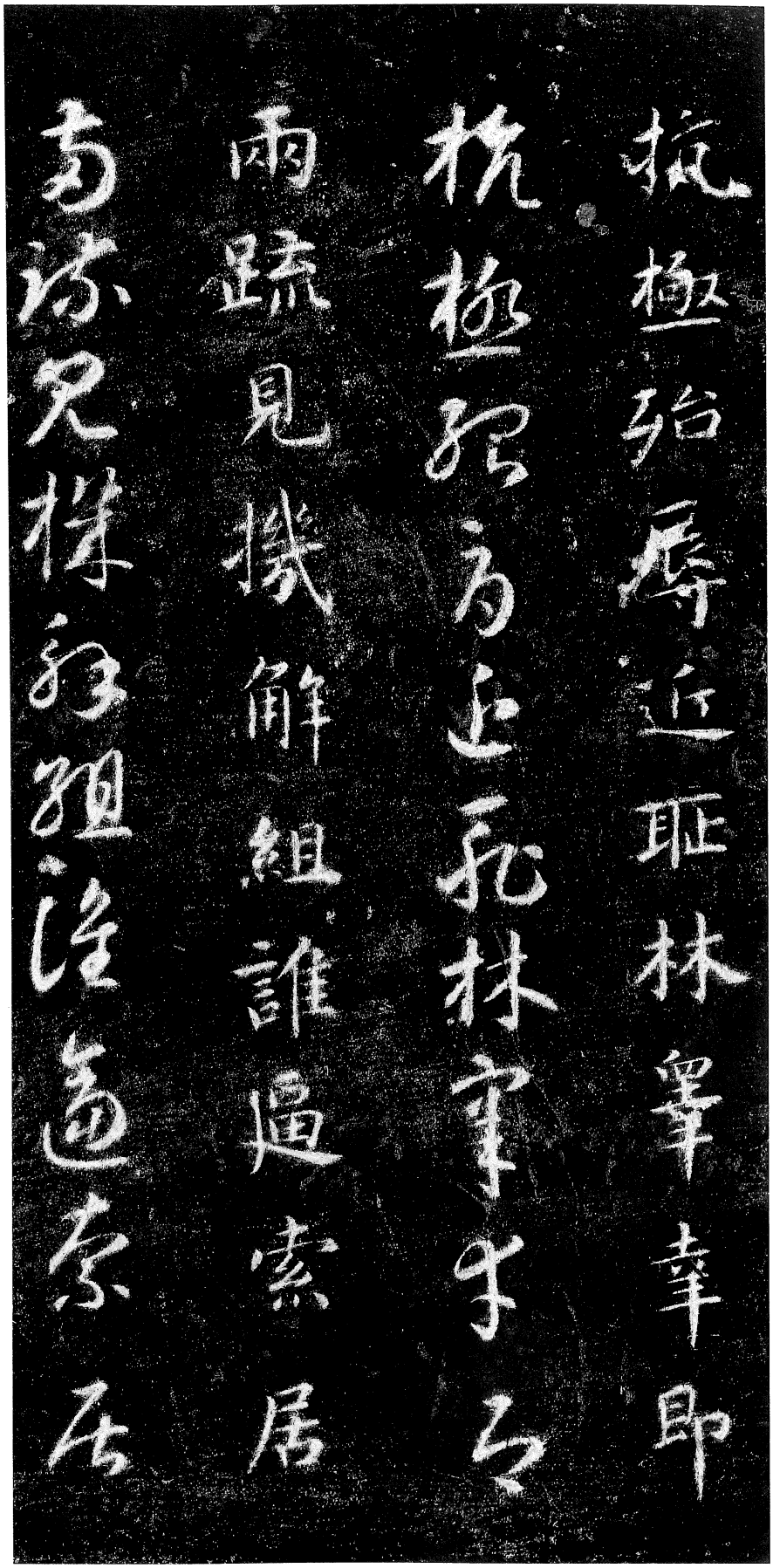
黜陟。孟軻敦素。史魚秉直。庶幾中庸。勞謙謹勅。聆音

黜陟す。孟軻は素を敦くし、史魚は直を秉る。中庸を庶幾い、労謙して謹勅にす。音を聆き



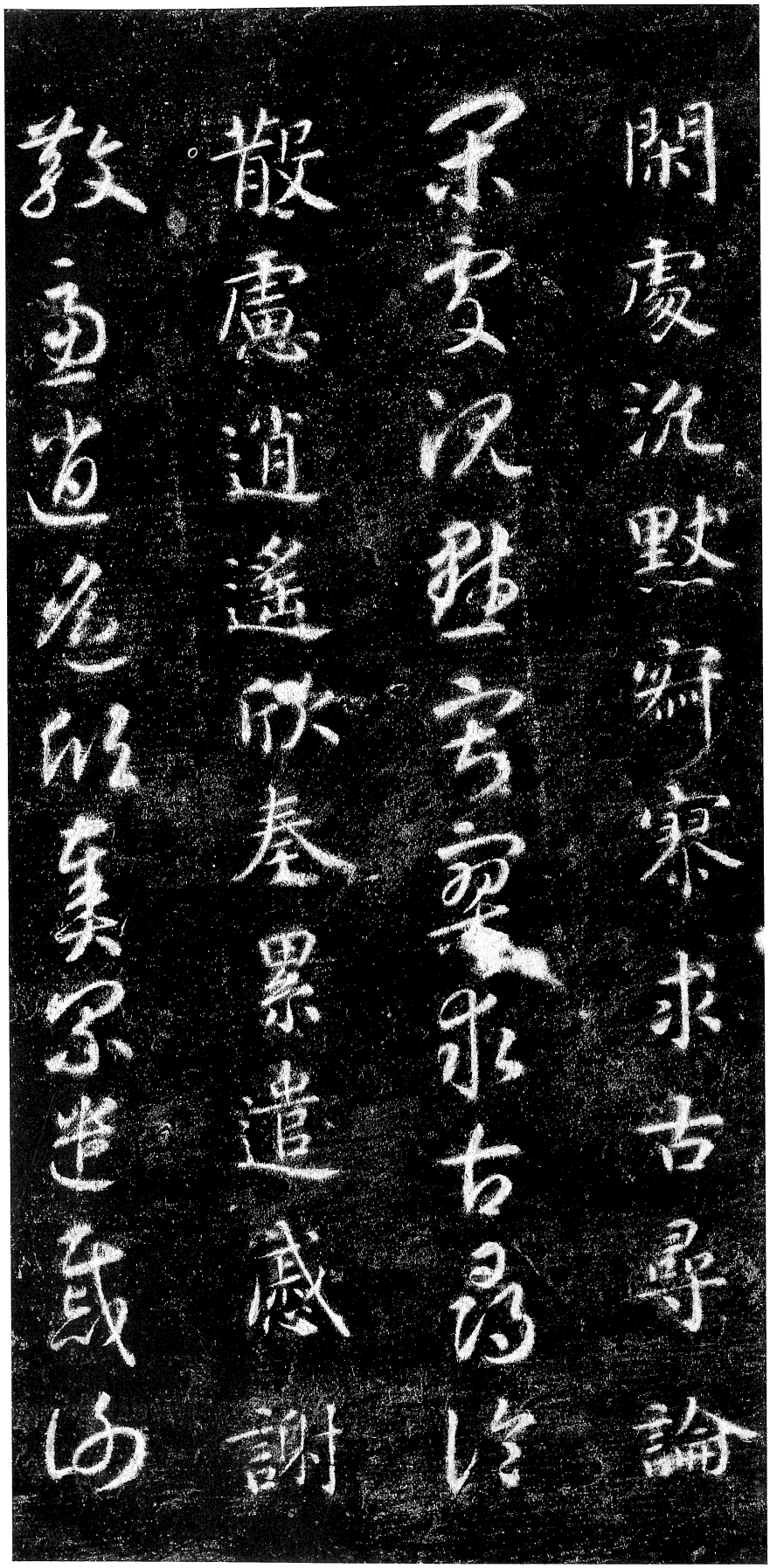
察理。鑑貌辯色。貽厥嘉猷。勉其祗植。省躬譏誡。寵增

理を察し、貌を鑑み色を辯ず。厥の嘉猷を貽し、其の祗植を勉む。躬を譏誡に省み、寵増せば



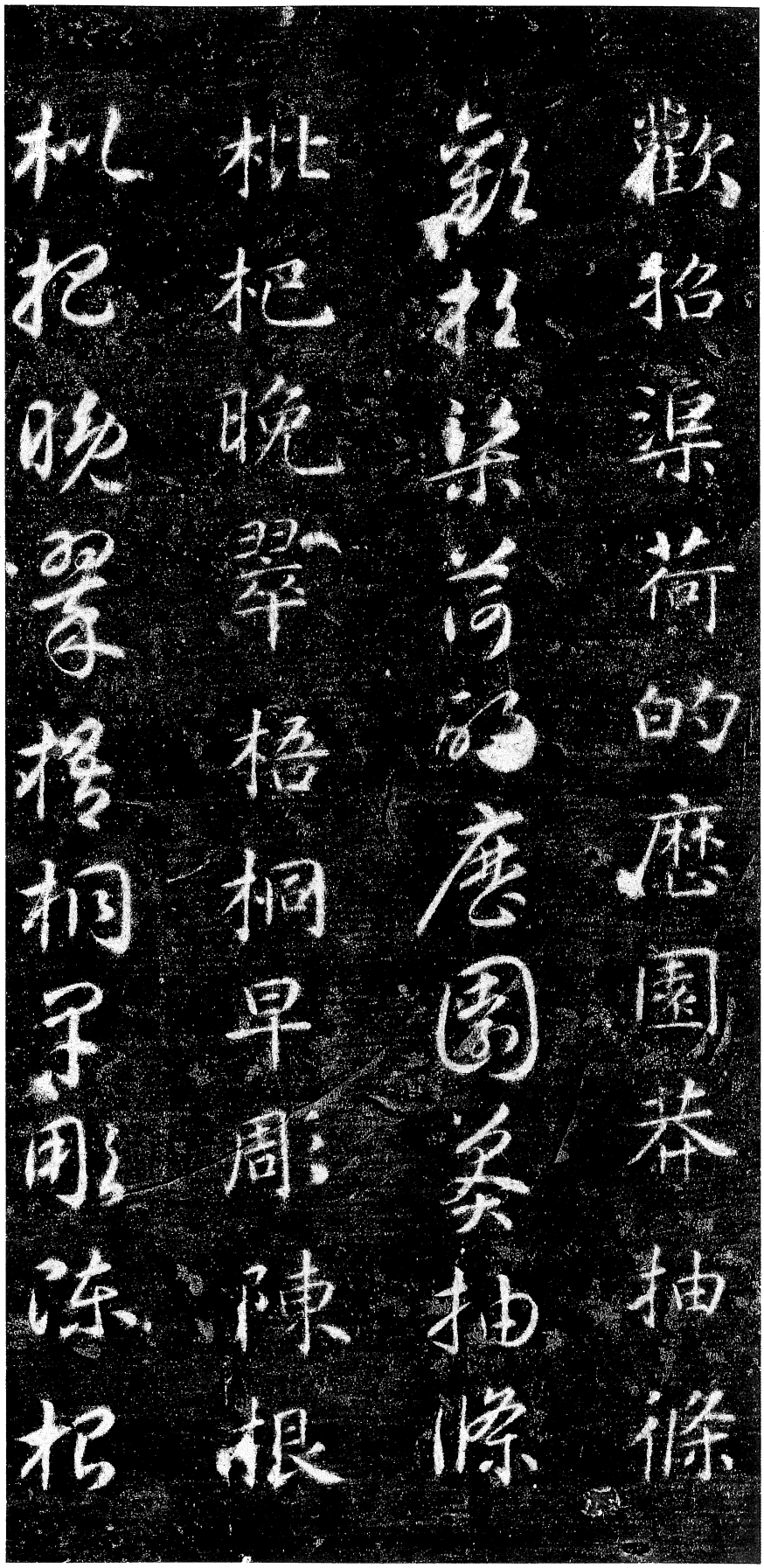
抗極。殆辱近耻。林皋幸卽。兩疏見機。解組誰逼。索居

抗極まる。辱に殆く恥に近きときは、林皋に即かんことを幸え。両疏は機を見、組を解きては誰か逼らん。索居



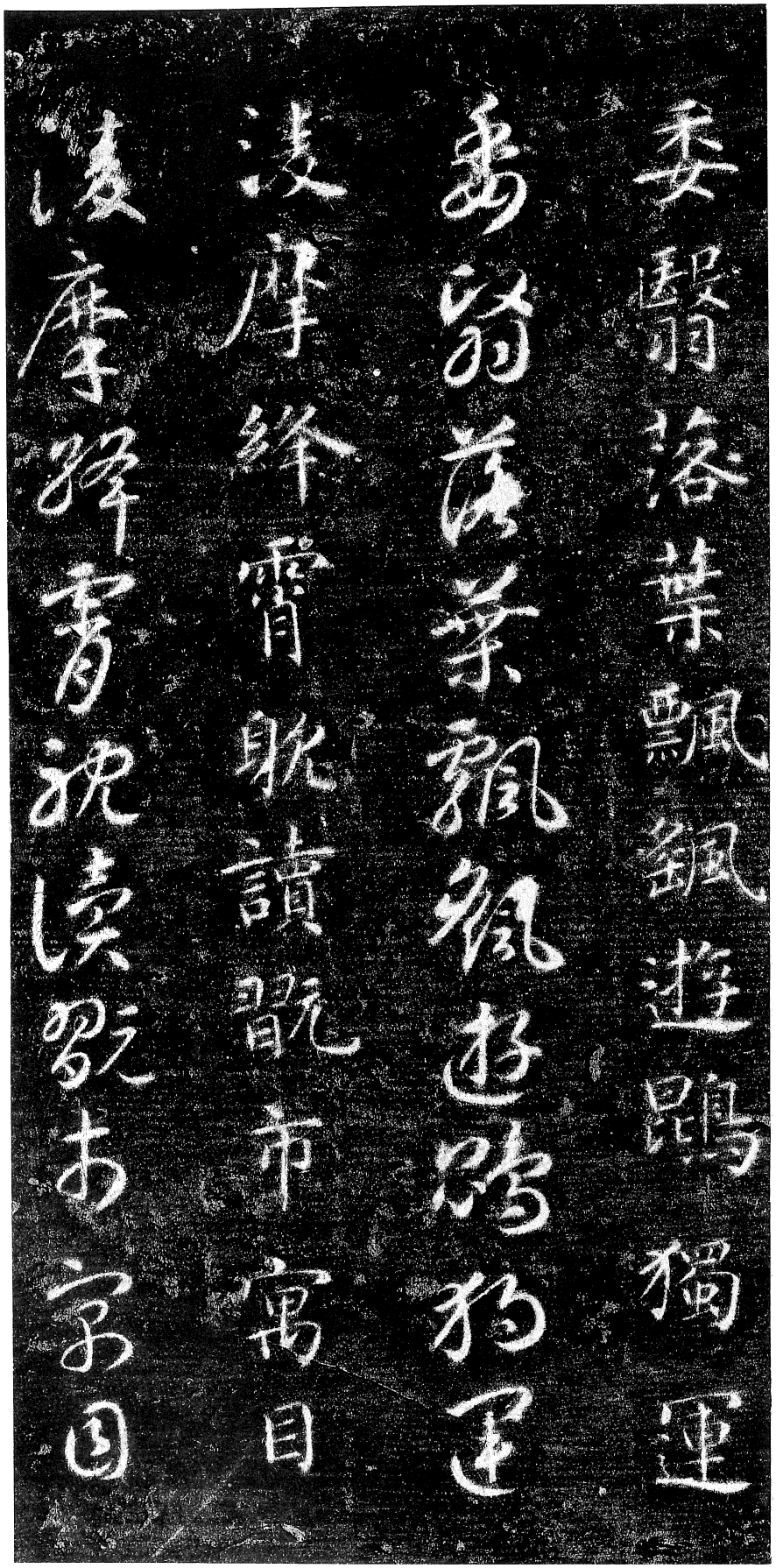
閑處。沈默寂寥。求古尋論。散慮逍遙。欣奏累遣。感謝

閑処し、沈黙して寂寥たり。古を求めて尋ね論じ、慮いを散じて逍遙す。欣び奏まり累いを遣り、感みを謝して



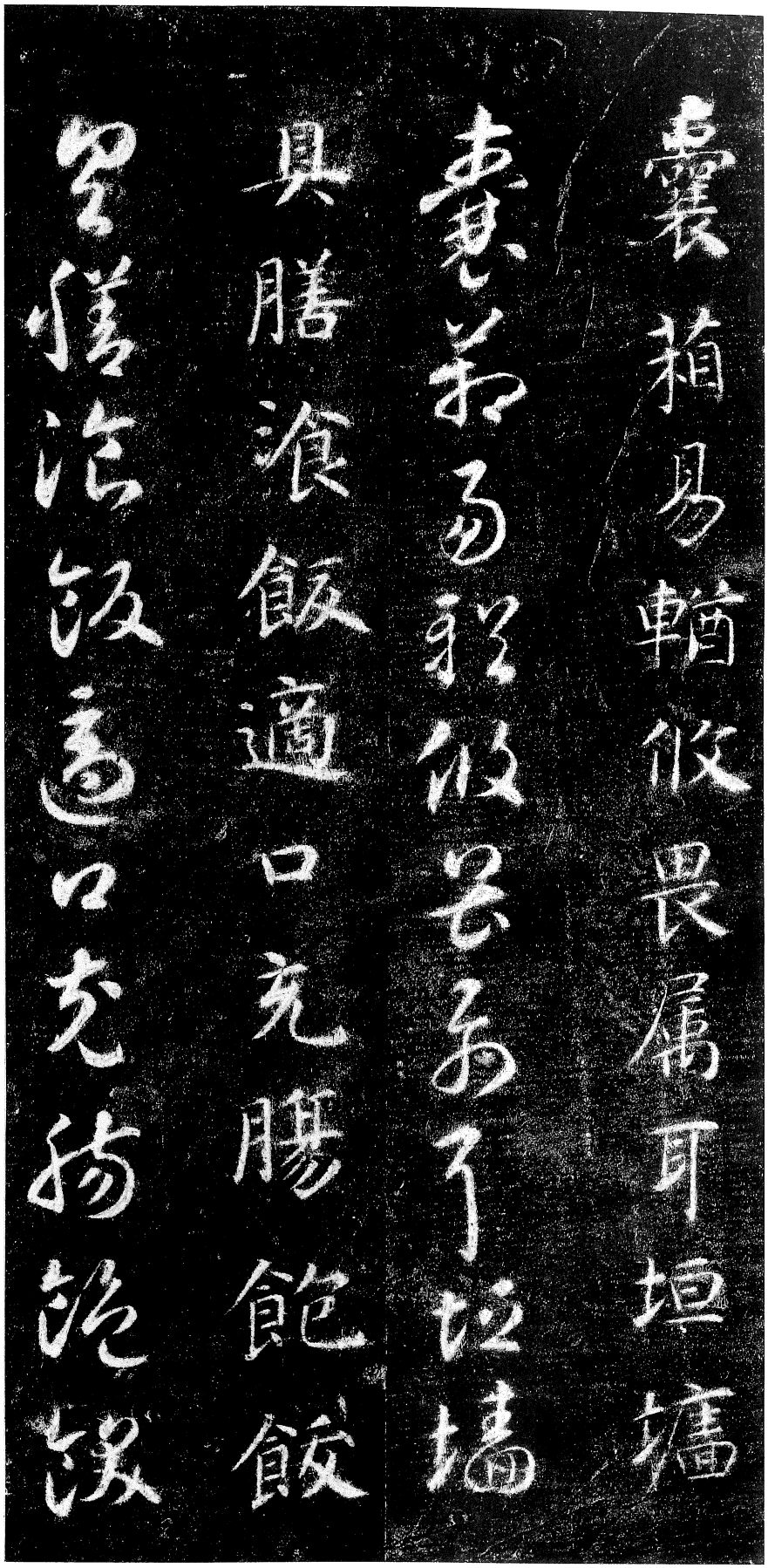
歡招。渠荷的歴。園莽抽條。枇杷晩翠。梧桐早彫。陳根

歓び招く。渠荷は的歴として、園莽は条を抽んず。枇杷は晩く翠に、梧桐は早く彫む。陳根



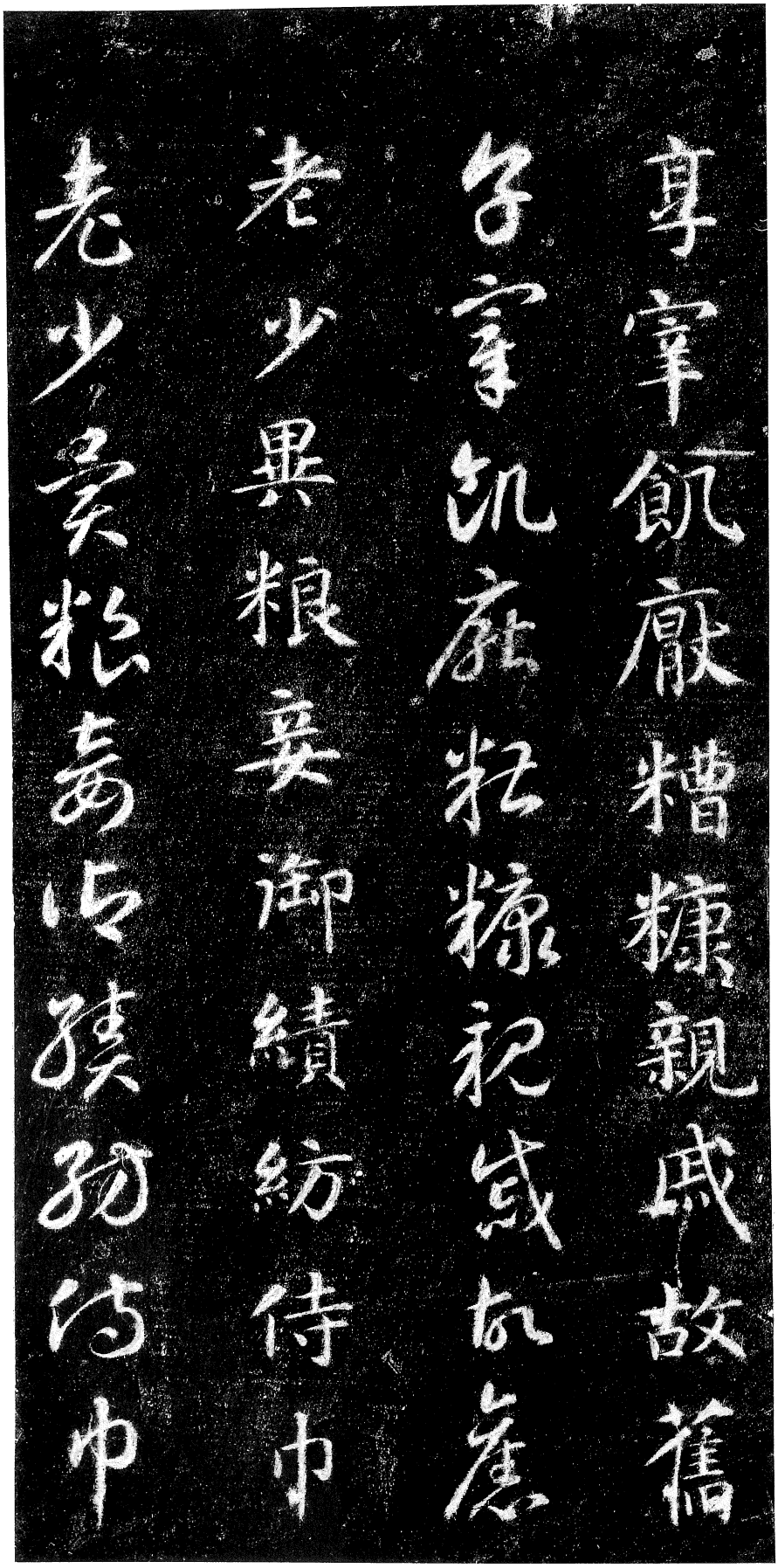
委翳。落葉飄颻。遊鵾獨運。凌摩絳霄。耽讀翫市。寓目

委翳あり、落葉飄颻す。游鵾は独り運り、絳霄を凌摩す。耽読して市に翫び、目を〔嚢箱に〕寓す。



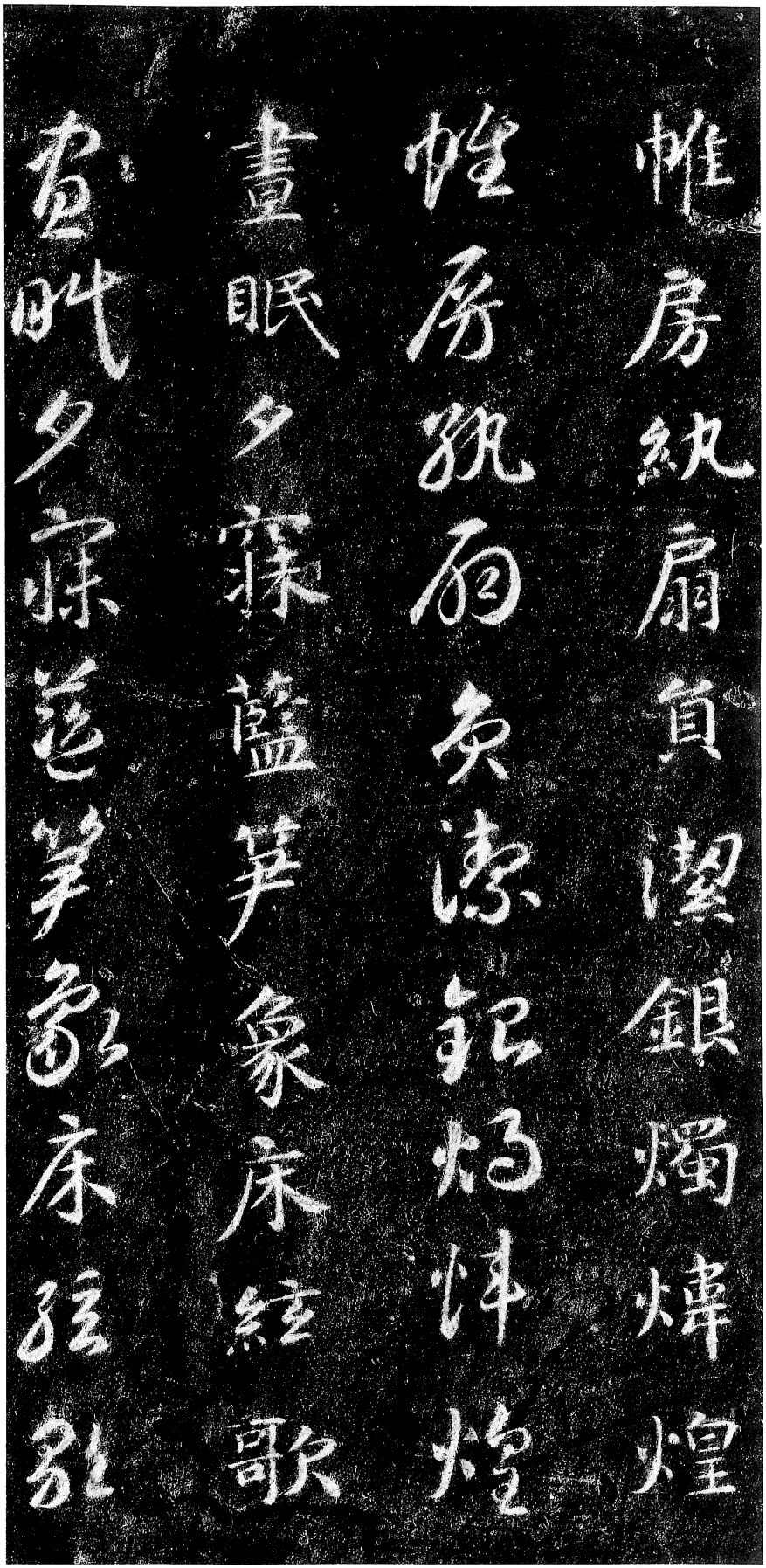
囊箱。易輶攸畏。屬耳垣墻。具膳飡飯。適口充腸。飽飫

易輶は畏るる攸、耳を垣牆に属す。膳を具え飯を餐い、口に適い腸に充つ。飽けば（烹宰に）飫き、



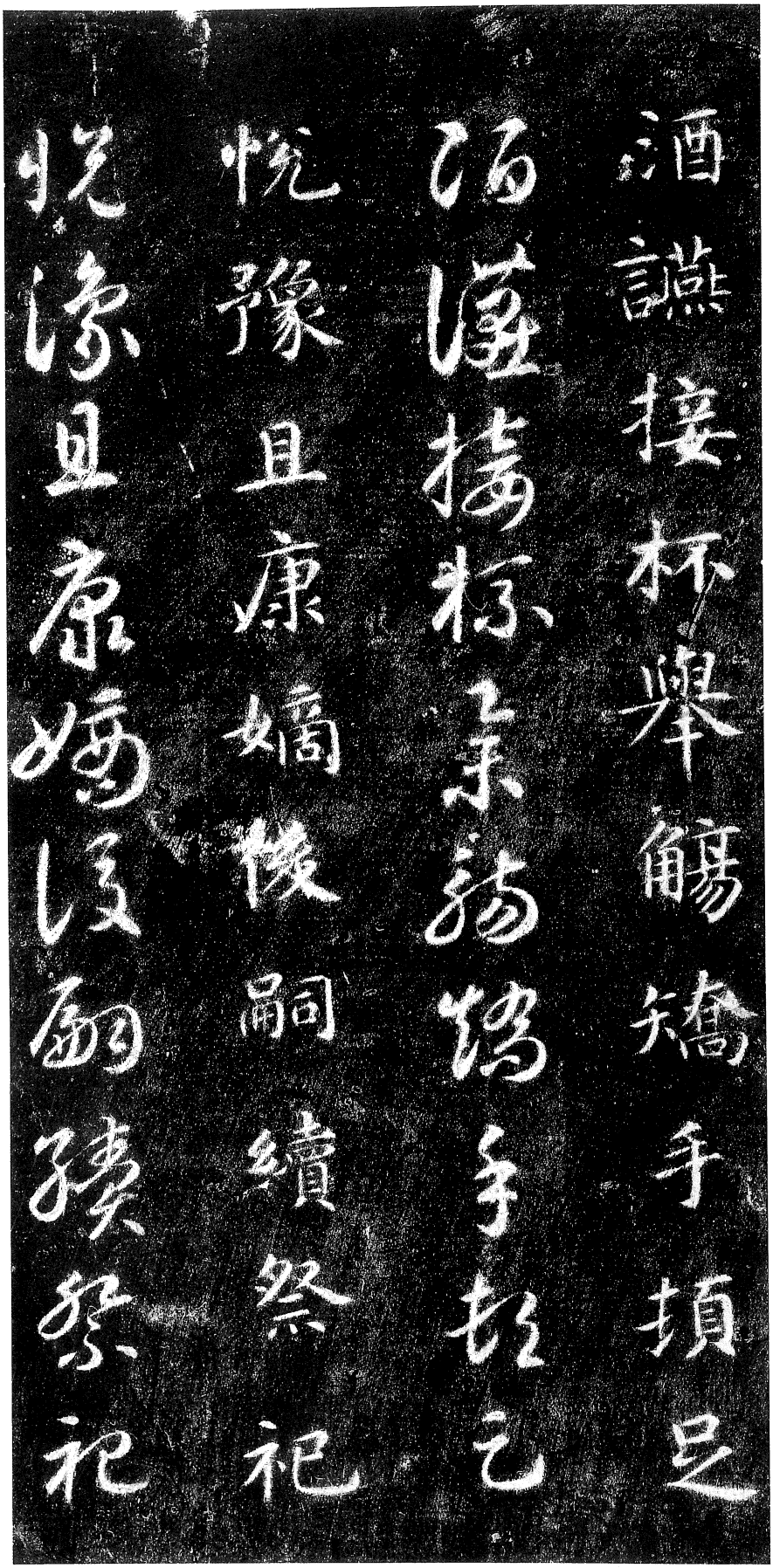
享宰。飢厭糟糠。親戚故舊。老少異粮。妾御績紡。侍巾

飢えれば糟糠にも厭く。親戚故旧、老少は糧を異にす。妾御は績紡し、(帷房に)侍巾す。



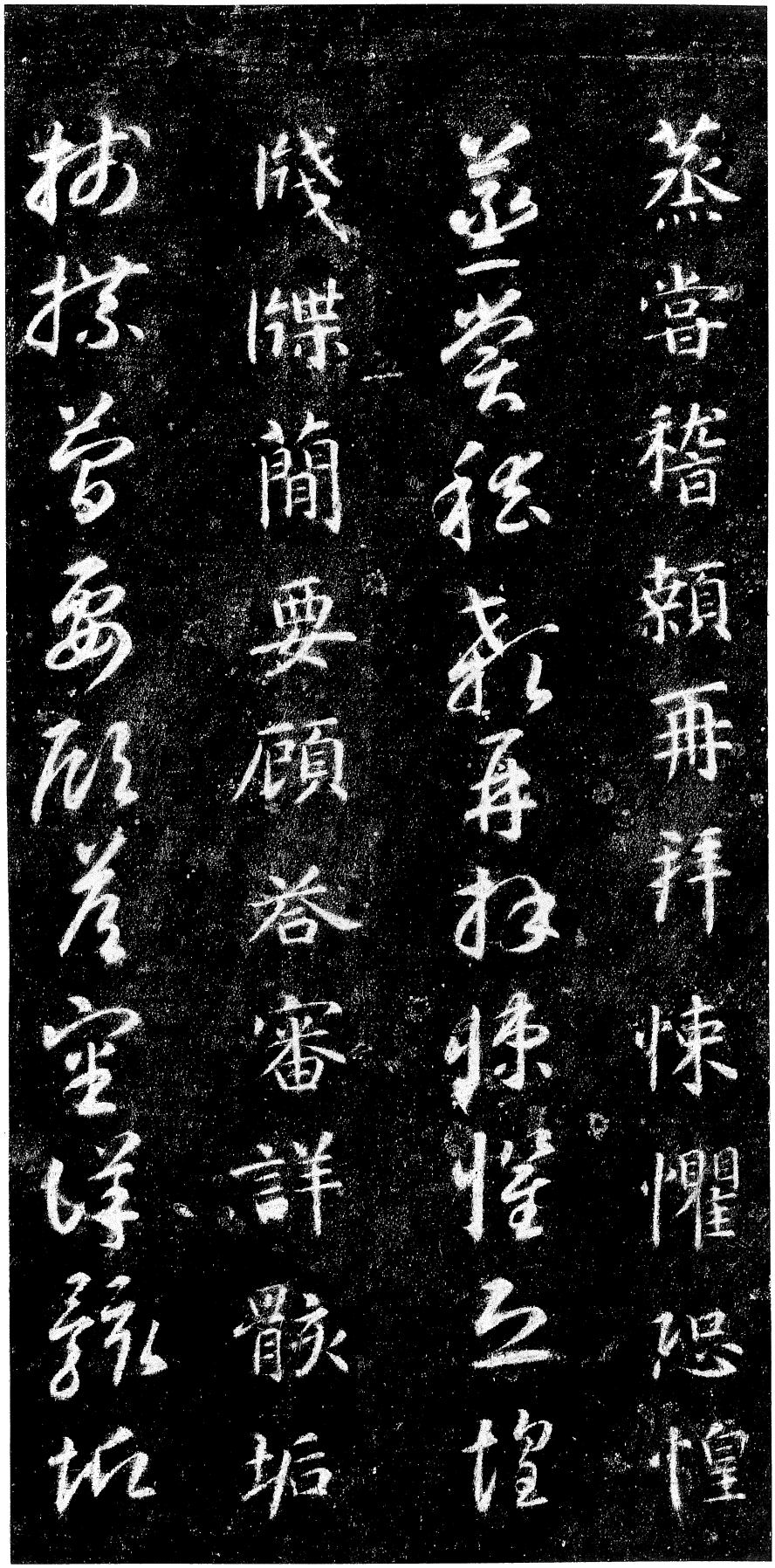
帷房。紈扇員潔。銀燭煒煌。晝眠夕寐。藍笋象床。絃歌

紈扇は圓く潔く、銀燭は煒煌たり。昼は眠り夕は寐ぬ、藍笋と象牀あり。絃歌



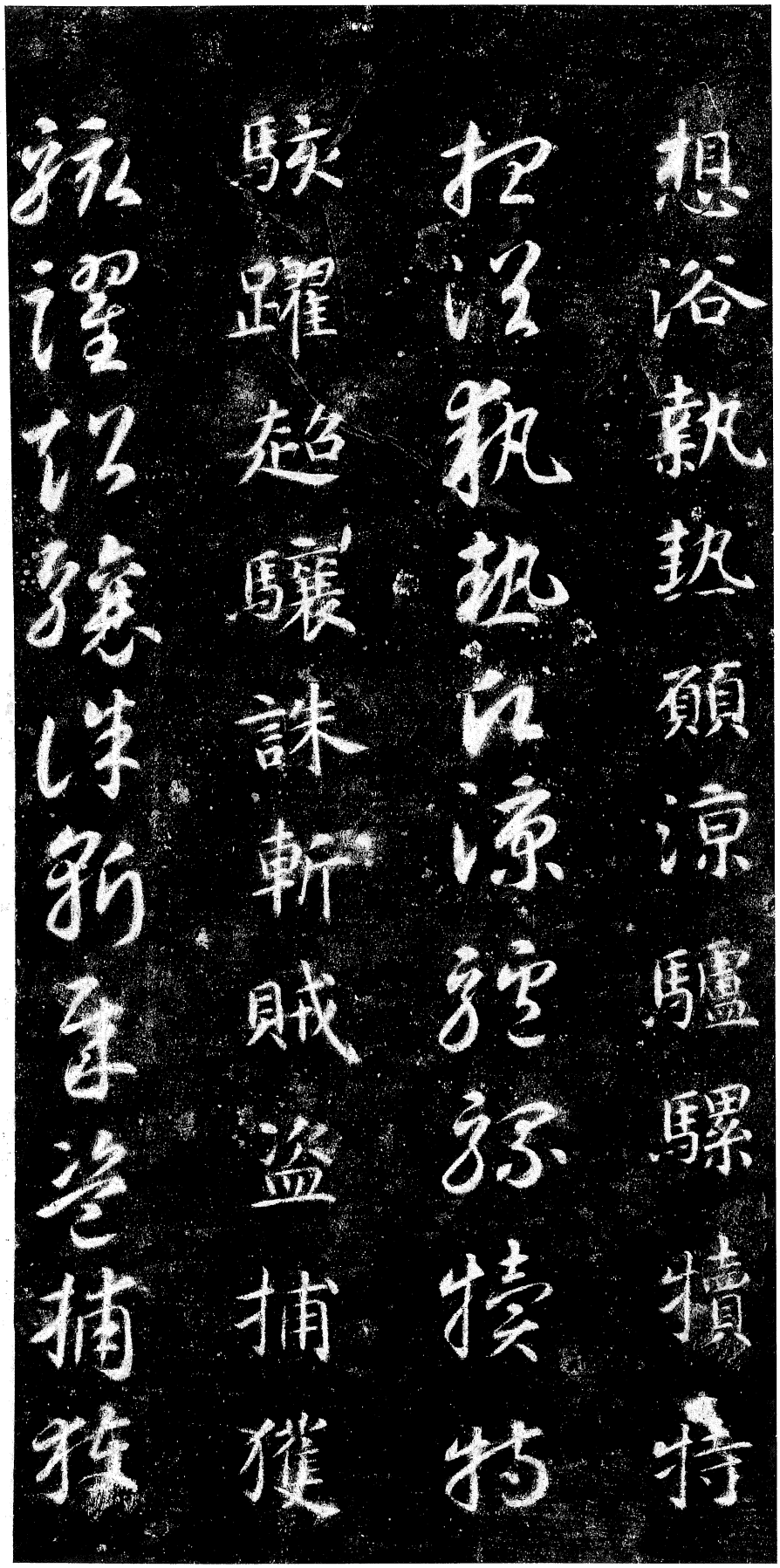
酒讌。接杯舉觴。矯手頓足。悅豫且康。嫡後嗣續。祭祀

酒讌し、杯を接え觴を挙ぐ。手を矯げ足を頓し、悅豫して且つ康し。嫡後は嗣続し、祭祀



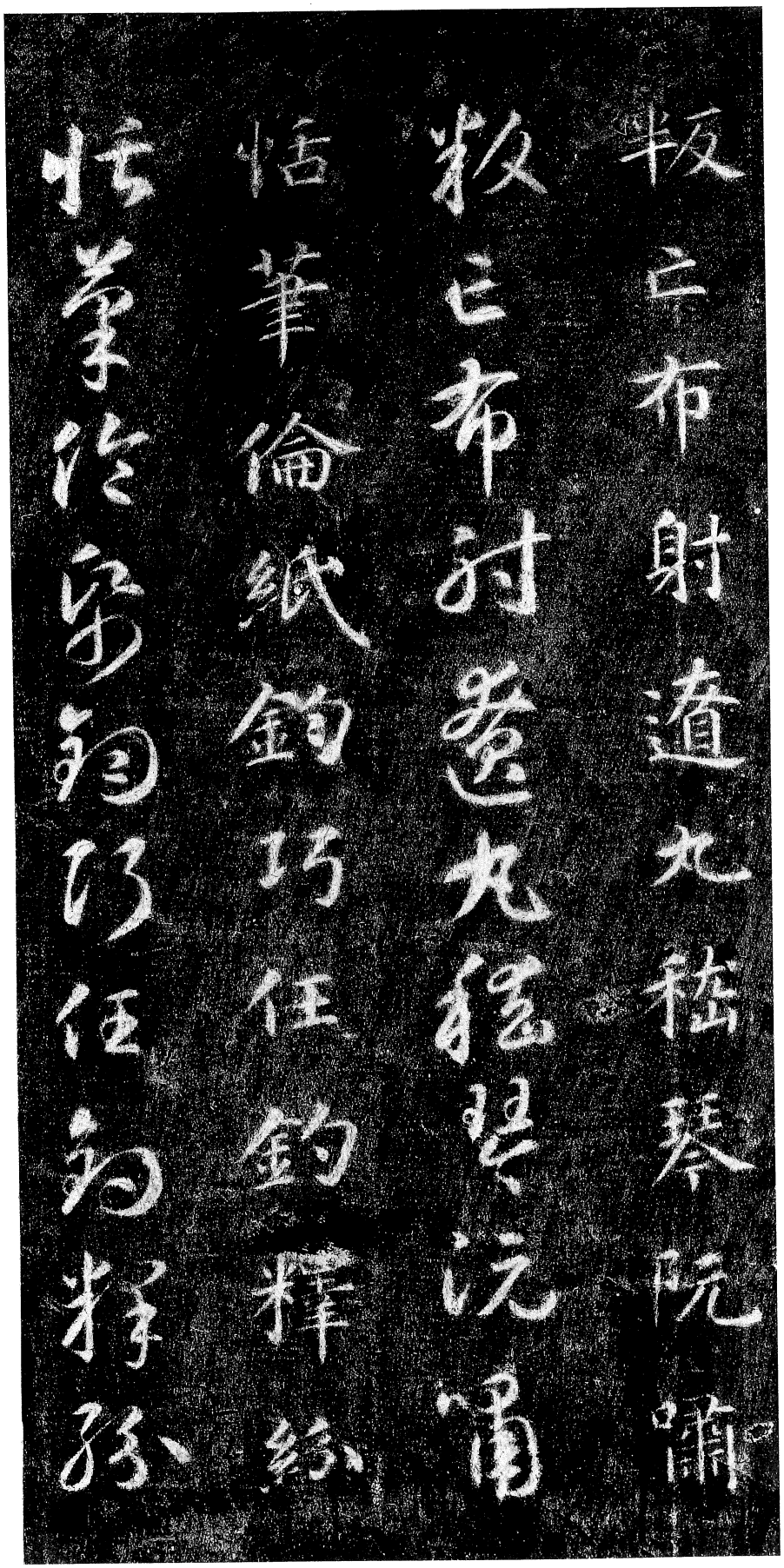
蒸嘗。稽顙再拜。悚懼恐惶。牋牒簡要。顧答審詳。骸垢

烝嘗す。稽顙再拜し、悚懼恐惶す。牋牒は簡要にし、顧答は審詳にす。骸に垢つくときは



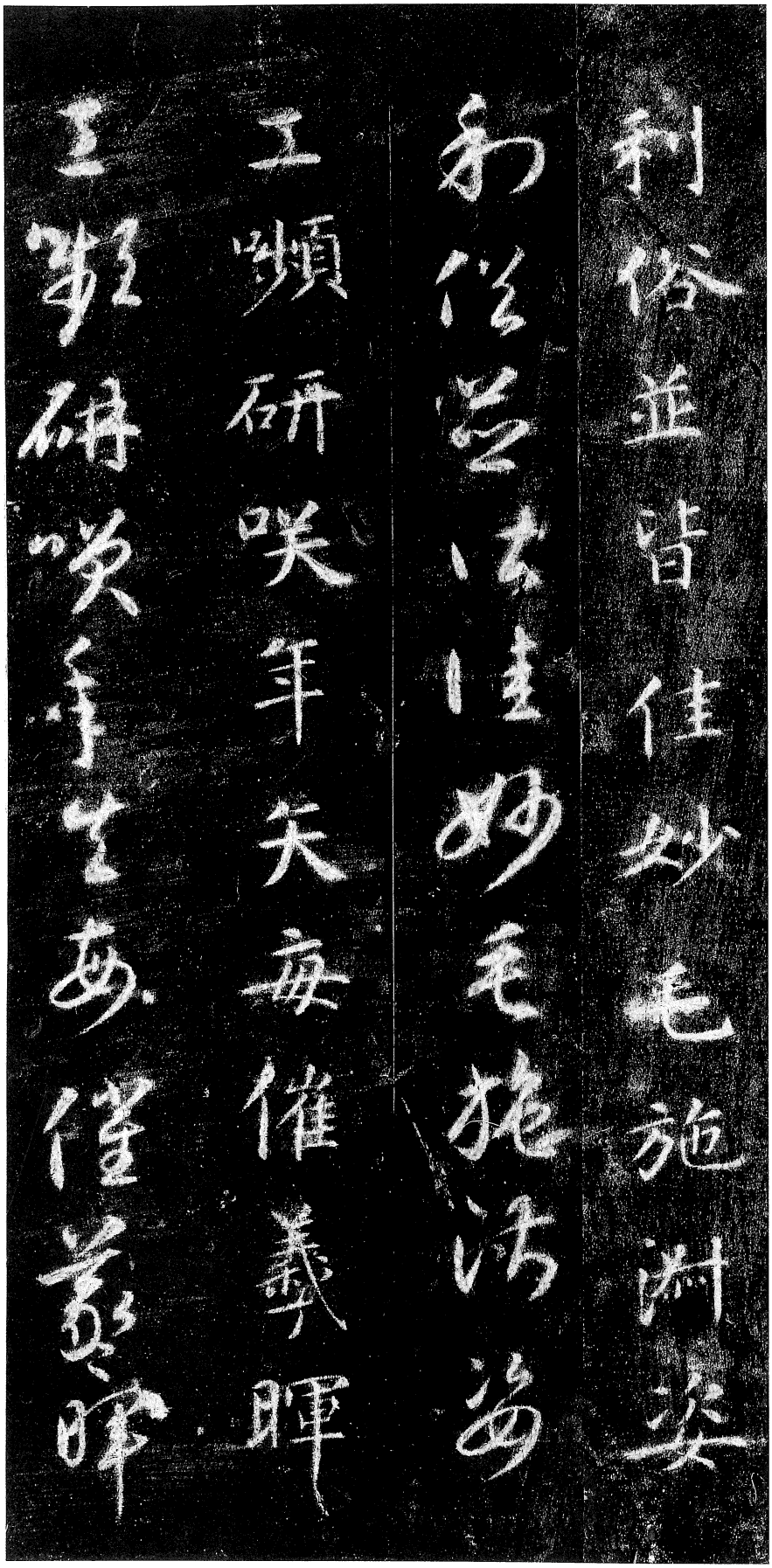
想浴。執熱願涼。驢騾犢特。駭躍超驤。誅斬賊盗。捕獲

浴を想い、熱を執るときは涼を願う。驢騾犢特、駭躍超驤す。賊盗を誅斬し、〔叛亡を〕捕獲す。



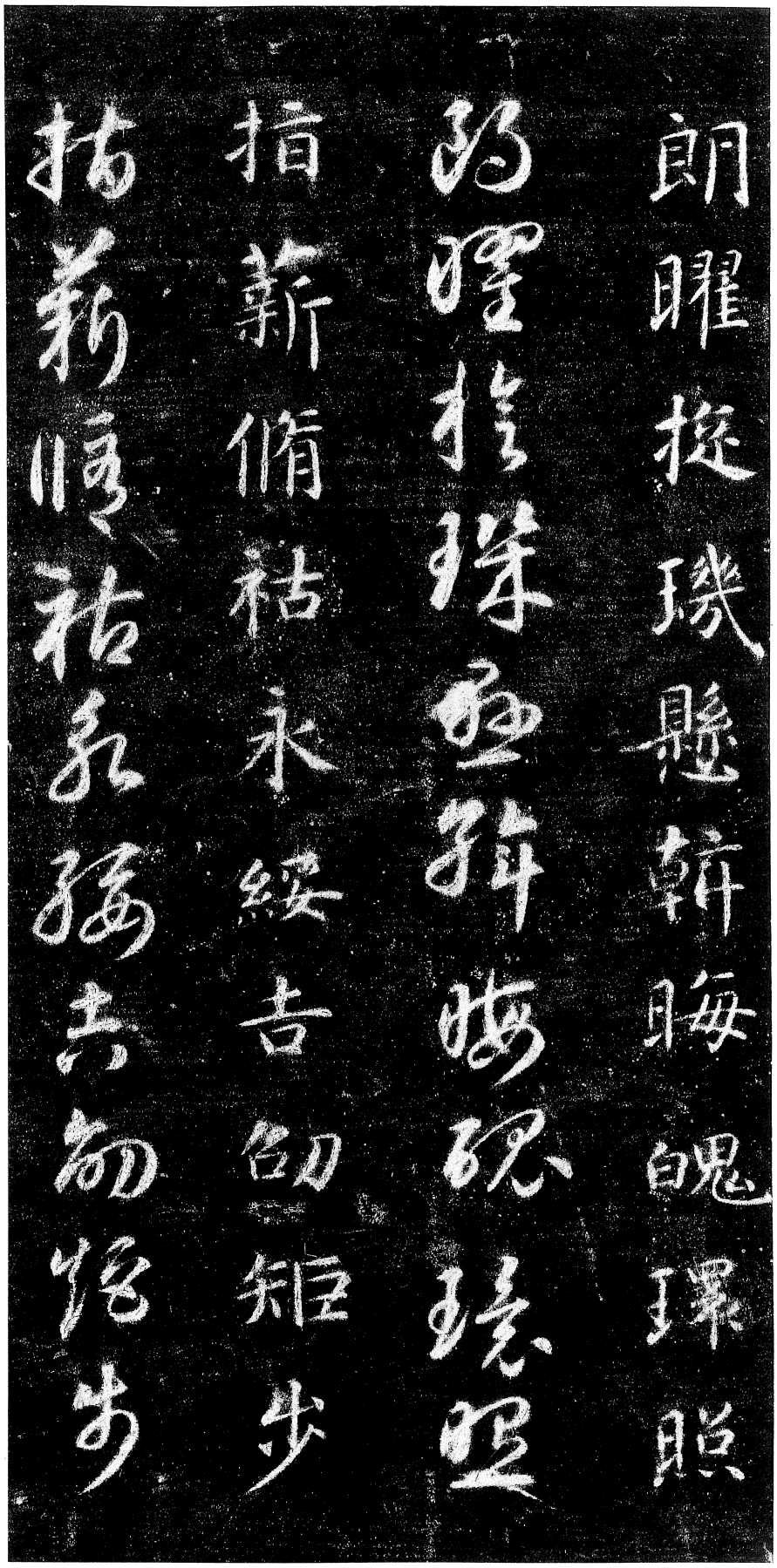
叛亡。布射遼丸。嵇琴阮嘯。恬筆倫紙。鈞巧任鈞。釋紛

布の射、遼の丸、嵇の琴、阮の嘯。恬の筆、倫の紙、鈞の巧、任の鈞。紛を釈き



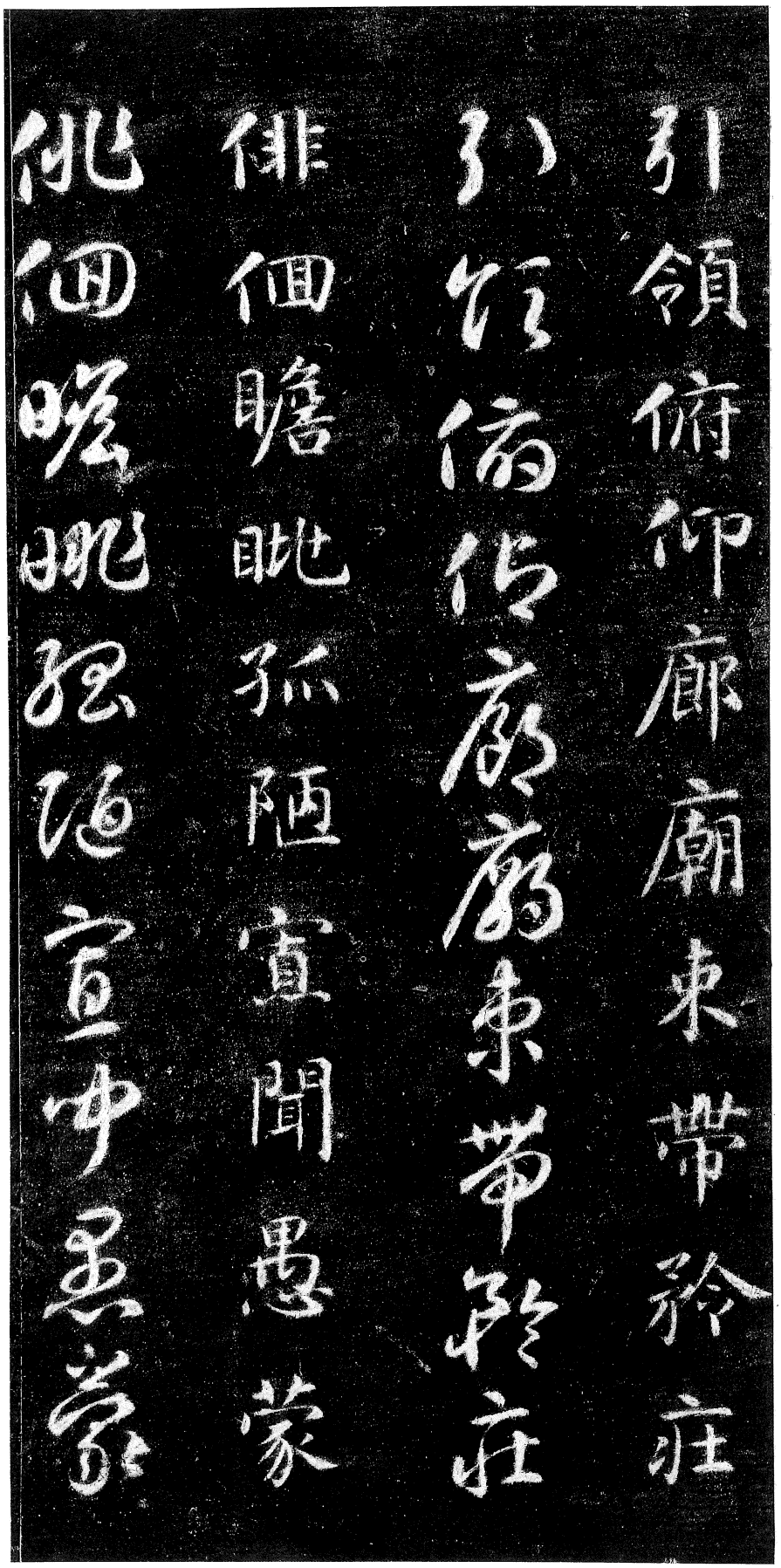
利俗。並皆佳妙。毛施淑姿。工嚬研咲。年矢毎催。羲暉

俗を利し、並に皆な佳妙なり。毛施淑姿あり、工みに嚬み研かに咲う。年矢毎に催り、曦暉



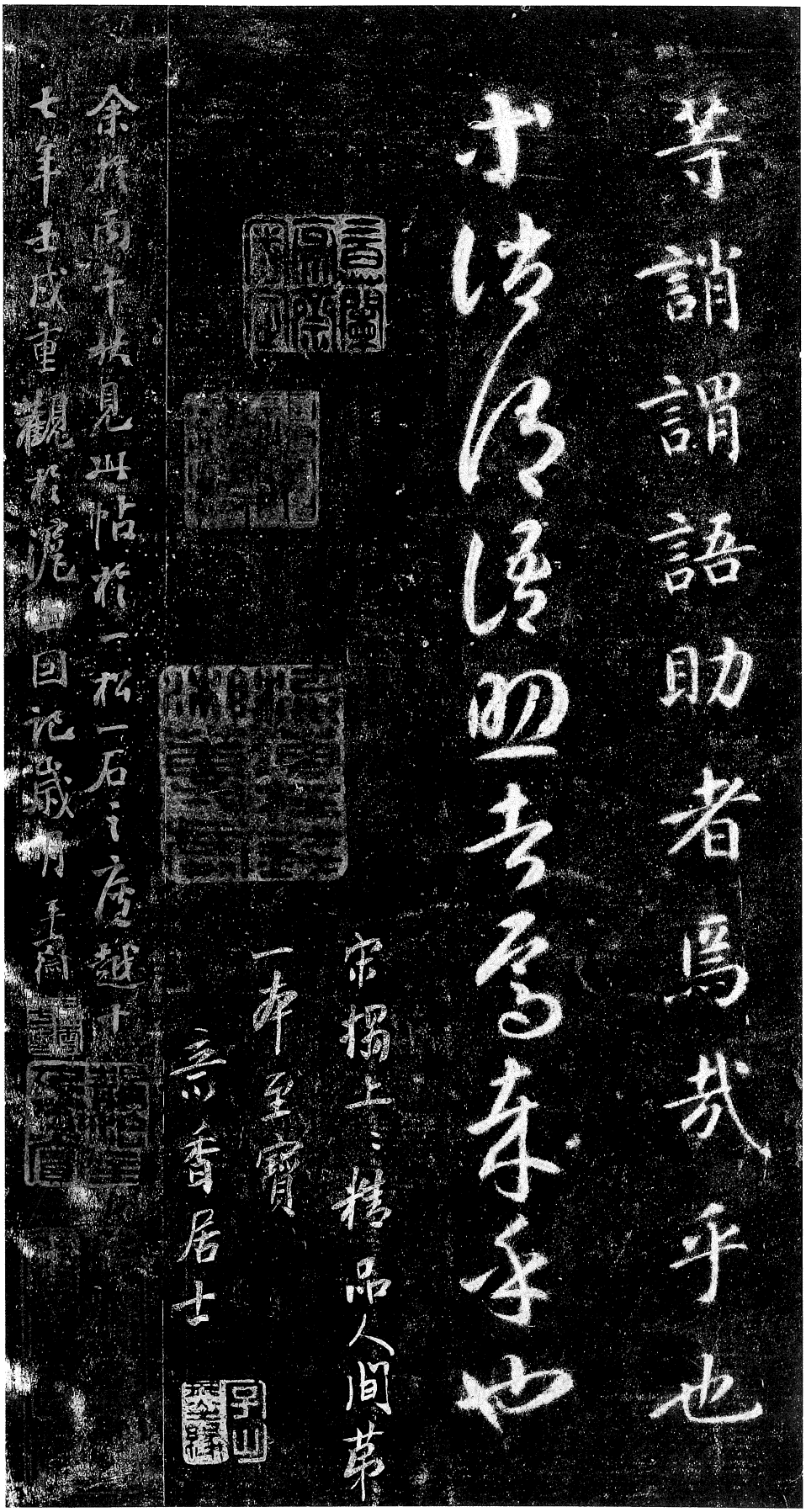
朗曜。旋璣懸斡。晦魄環照。指薪脩祜。永綏吉劭。矩步

朗曜たり。旋璣懸斡して、晦魄環照す。薪を指して祜いを脩むるときは、永く綏らかに吉劭なり。矩歩



引領。俯仰廊廟。束帶矜莊。俳佪瞻眺。孤陋寡聞。愚蒙

引領して、廊廟に俯仰す。束帯は矜莊にして、徘徊瞻眺す。孤陋寡聞は、愚蒙と



等誚。謂語助者。焉哉乎也。
等しく誚らる。語助と謂う者は、焉哉乎也なり。

解説

角井博

「千字文」は四字一句、二五〇句から成る四言古詩で、一般には周興嗣（四七〇?―五二一）の作として知られている。それは梁の武帝が王子たちの手本用に、殷鉄石に命じて王羲之書の中から重複しない一〇〇〇字を集めて模本を作らせ、当代随一の文章家周興嗣に命じ、整然とした韻文にまとめさせたというものである。彼は一夜にしてこの千字文を編綴して進上し、そのため鬢髪がみな白くなったという。その原典は王羲之書の集字・鉤摹ゆえ、おそらく草書で、それも文字の大小、書風などかなり統一性を欠き、あるいは偏旁を組み合わせたものもあったかと思われるが、その釈文として右側に真書（楷書）を配したものなのであろう。

智永〈生卒不詳〉は浙江会稽の人。俗姓は王氏、名は法極、東晋の王羲之の七世の孫に当たるという。若くして兄の孝賓とともに出家し、兄は名を恵欣と改め、弟は智永と称し、会稽の嘉祥寺に住んでいたが、梁の武帝は欣・永の両人が共に仏教を厚く崇めたので、その寺を永欣寺と改めたという。智永はこの千字文を武帝からか、殷鉄石あるいは王子たちから借覧してまず模本を作り、その模本を基にさらに臨摹に努めたようである。諸書は、彼が永欣寺閣上に三〇年間も閉じ籠もって真草千字文八〇〇本を臨書し、それを江東の諸寺に一本ずつ施与したと伝えている。智永の写した千字文は唐宋代にはかなり残っていたようだが、現存する真跡本は我が国の一本のみで、ほかに墨拓二種（関中本・宝墨軒本）が伝えられている。

本書掲載分は原色法帖選⑯と同じで、明清人の激賞した精拓の関中本である。帖首に明の董其昌の題簽、題記があり、帖尾に顧文彬、呉雲の題跋、観記がある。書式は真跡本と全く同じで、標題二行、本文は真草を二列に並べて二〇〇行であるが、宋朝の諱〈玄〉〈匡〉二字を闕筆している。本文の後に宋の薛嗣昌の一五行の跋があり、智永の逸話と勒石の経緯を刻しているが、それによると大観三年（一一〇九）二月十一日、薛嗣昌が長安の崔氏所蔵の真跡本により模刻し、長安（関中）の漕司南庁に置いたとある。その末尾に「姪方綱摹」・「李寿永寿明刊」の二行一〇字の小字が見られるが、この一〇字のあるのは原刻本で、翻刻にはこれがないという。関中本は真跡本に比し、細かな筆勢が消えてしまっているが、整斉な字形、おっとりとまとまった高逸の書風は、見る者の目を楽しませてくれ、手習いにも恰好のものと言うことができよう。